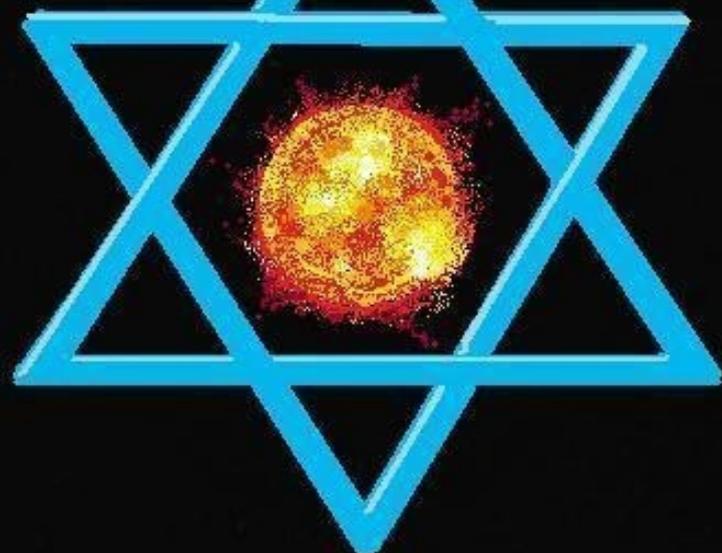
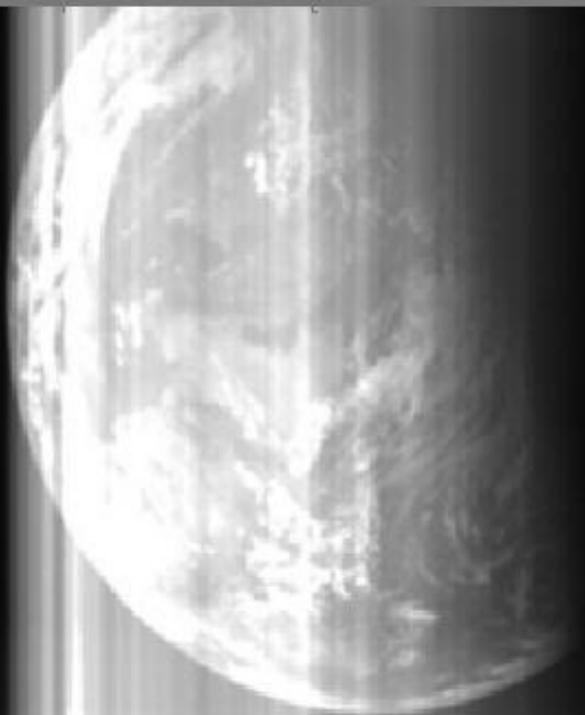


旧約聖書に預言されていた

# 日本の使命

補講版



荒らす憎むべき者が  
聖なる場所に立つのを見たならば

月日の経つのは早いものです。「旧約聖書に預言されていた日本の使命」（以下「本編」と略称）を公開してから、はや二年が過ぎました。振り返ると、時代が加速度をもって旧約聖書が預言した世界へと導かれてゆくのが感じます。

この2年の間、私にとって大きく変わったことがあります。それは「本編」では特定できなかった「末日」がいつの日なのかが解けたことです。

以下、「本編」より引用します。

『2016年のアメリカに何が起こるのか、起こらないのか、ダニエル書は不確定要素となっている。やはりアメリカに対する預言の解き明かしはアメリカ人に任せることにする。私は日本の預言解説者として、日本に影響を及ぼすアメリカ預言のみに限定し専念することにより、日本を解き明かすしかないのだ。』

本編を書き進めていた当時、私は超難関とされるダニエル書の預言を解くことのできるのは欧米の預言解説者であろうと考えていました。難しすぎて私にはとても解けないと思っていたのです。けれどそれは大きな間違いでした。なぜならダニエル書を読み解く鍵は、アメリカではなく日本が握っていたからです。

本編では謎だった旧約聖書のダニエル書が解けたので、何年、何月、何日が「末日」なのかを、当「補講版」にて明らかにしてゆきます。「末日」をひも解くために使用する聖句は、ダニエル書の一部とイエスキリストの言葉が中心となります。つまりイエスの預言や例え話によってダニエル書を読み解くのです。

その糸口として、新マヤ歴と本編での「神が顧みられる日」が「2015年9月3日」で一致したことを取り上げ、そもそも「末日」とは、なにが終わる日なのかを明らかにします。

人類滅亡の日として世界を騒がしたマヤ歴の終わり、「2012年12月21～23日」の終末予言も、本編の予測通り何事もなく過ぎ去りました。けれど「現在のグレゴリオ歴と古代暦を換算するGMT対照法に計算ミスがあり、正しく換算し直してみるとマヤ歴の人類滅亡の日は2015年9月3日となる。」とのニュースが2012年12月23日前後、世界に流布しました。正しく換算したマヤ歴の長期歴約5000年の最終日は2012年12月21～23日ではなく、2015年9月3日だと言うのです。

一方、本編表紙の副題に掲げた「70年終わって後、主はツロを顧みられる」の意味は「戦後70年経った後に『神が日本を顧みられる』」との意味であり、その日付は「2015年9月3日」ですから、奇しくも新マヤ歴と一致することになりました。

アメリカ、イギリス、フランス、カナダ、ロシア等々の国々は2015年9月2日を日本敗戦の日と位置付けています。なぜなら日本がアメリカに負けた日は、日本がポツダム宣言に調印した日＝正式文書に日本軍の無条件降伏を調印した日＝第二次世界大戦終息の日＝1945年9月2日だからです。したがって終戦から70年が終わった後の日は2015年9月3日となります。ただし単純に敗戦から70年後とすると、2016年以降となりますが。

新マヤ歴が今度こそ正しいのかどうか私にはわかりません。仮に正しいとしても新マヤ歴と本編での「神が顧みられる日」が一致したのは年月日だけであり、その日が意味する内容は別物です。なぜなら日本敗戦の70年後は「人類滅亡の日」などではないからです。「末日」ですらありません。詳細は本編に記述したので補講版では説明しません。

本編と重複する内容は今後当最小限にとどめるつもりです。これからは本編を読まなくても内容が把握できるよう注意して書き進めて行きます。

ここから本題に入ります。

「末日」、その具体的な年月日を示す前に、はっきり定義したいことがあります。

「末日」には物事が終わる日という意味があります。では旧約聖書で預言されている「末日」とは、なにが終わるといふ日なのでしょう。例えば駅前のデパートのバーゲンセールが終わる日と、地球上の生命が終わる日とでは、同じ終わる日でも意味がかなり違って来るからです。まず、聖書のいう「終わりの日」が、マヤ歴等の終末予言のいう「人類滅亡の日」とは全く違う意味であることを説明していきます。

イエスキリストがオリブ山ですわっている時、弟子たちが「末日」について質問しています。「いつ、そんなことが起きるのでしょうか、あなたがおいでになる時や、世の終わりには、どんな前兆がありますか」（マタイによる福音書24章3節）

その質問はイエスと弟子たちがゼルバビル神殿に詣でたさいに、弟子たちがその建物の豪華さ、荘厳さに感嘆していたのに対し、イエスが「よくいっておく。その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」（マタイ24章2節）と預言したことが発端になっています。

イエスは弟子たちが、超高層ビル群に驚く田舎出の修学旅行生のように、「やべー」と口をあぐり開けて驚嘆している神殿は、もうすぐバラッバラになる」と預言したのです。

実際紀元70年にゼルバビル神殿はローマ軍によって徹底的に破壊されました。ゼルバビル神殿を構築している石は金箔で覆われていたので、その金箔をはぎ取るためにローマ軍はすべての石をひっくり返したからです。文字通り「その石一つでもくずされずに、そこに他の石の上に残ることもなくなるであろう」との預言が成就したのです。

弟子たちは将来ゼルバビル神殿が破壊される日こそが「末日」だと思っていたので、いつ神殿が破壊されるような終わりの日が来るのかを質問しています。その弟子たちの質問に対しイエスは、「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」（マタイ24：14）と預言しています。

今でこそキリスト教信者は20億人を超え、世界最大の信者を有していますが、弟子たちが質問した当時はイエスが福音を宣べ伝えはじめてから数年しか経っていません。その時点、恐らく紀元29年頃に、「福音はすべての民、全世界に宣べ伝えられるであろう」と言っているわけですから、その預言は紀元70年の神殿破壊の日をはるかに超えた未来に何かが「終わる日」であることがわかります。

現在、イエスが預言した通りに福音は全世界に宣べ伝えられました。北朝鮮でさえ首都平壤はかつて日本の併合時代に「東洋のエルサレム」と呼ばれたほどに、キリスト教会や神学校が乱立していた時代もあったのです。ともあれ現在、終わりの日が来る素地は出来上がっています。

上記「そしてそれから最後がくるのである」に続くイエスの言葉が、「末日」とは、なにが終わる日なのかの導入部にあたります。以下マタイによる福音書、24章15節から19節。

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。屋上に居る者は、家からものを取り出そうとして下におりな。畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。」

上記の聖句の中で、「末日」を導き出すために必要となる三つの重要な点を説明させてください。

一つ目はイエスがダニエル書を名指した後、預言していることです。つまりイエスがダニエル書を解読していたからこそ上記の預言がイエスによって語られたのです。ならばダニエル書の解読はイエスの例え話や預言から導き出せることになります。

二つ目は（読者よ、悟れ）の文章は私が挿入したのではないということです。日本聖書協会発行、口語訳聖書の文章をそのまま載せているだけです。文語訳聖書だと（読む者さとれ）となります。つまり「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば」の言葉がとても重要なキーワードだということを「読者は悟れ」ということです。実際とんでもないキーワードなので、補講版表紙の副題に掲げたのです。

一般的な解釈では、「聖なる場所」とはイスラエルに今後建設されるであろう第三神殿とされています。その第三神殿を、欧州共同体を集中に治め絶大な権力を握った反キリストが破壊した時に、「末日」が始まるとされています。反キリストとは、映画オーメンの主人公、頭をつむじが666と三つもあったダミアンをイメージすればよいでしょう。たしかにダミアン的な人物がEUを手中に収めるということはあり得ますが、その人物が第三神殿を破壊する日が「終わりの日」の始まりであるとする一般的解釈はありえません。

なぜ一般的な解釈がそうなるのかについては紙面を割くほどの価値もないので割愛します。なぜならこの聖句に関しては、「一般的な解釈なんかじゃありませんよ」というのが、「読者よ悟りなさい」という意味でもあるからです。

三つ目に重要な点は、「荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのをみたなら、高い所に逃げなさい」と、訳されている点です。時系列的には、荒らす憎むべき者が先で、高い所に逃げるのが後のように訳されています。けれど原語では、荒らす憎むべき者が聖なる場所に立つことと、高い所に逃げることは、同じ事件だと記載されています。以下、直訳です。

15節～その時　そういう訳だから　あなた方が認識した（為）　その　嫌悪されるべき者が  
その　荒廃させるの　その　言われたは（を）通して　ダニエル　その　預言者の　立っている  
を　中で　所　聖、その　再び知るは　彼は理解し続けろ、

16節～その時　その　中で　その　ユダヤ　彼らは　逃れ続けろ　中へ　その　山、

つまり両方の事件は同じ「その時」の中で発生しているのです。このことは後に重大な意味をもつことになるので、頭の片隅に置いていてください。

さて、「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者」とはなんなのかを解き明かす前に、そもそも預言者ダニエルとはどんな人物で、終末の黙示文学とされるダニエル書の内容はどうなっているのかを説明します。

ダニエルという人物は、同時代を生きたエゼキエル書の著者エゼキエルによって、「ノア、ダニエル、ヨブ」こそが義人三勇士だとされるほどの人物です。（エゼ14：14）

ダニエル書はダニエルによって紀元前550年頃に書かれましたが、紀元三世紀に哲学者ポルフェリオスによって、「ダニエル書は紀元前200年頃に書かれた事後預言書だ」とされるほどに、預言が的確に的中した書物です。

ダニエル書の物語を一例だけ示します。時は紀元前603年、バビロニア帝国の王ネブカドネツアルが見た夢の解き明かしの話です。以下、ダニエル書2章を要約しました。

ネブカドネツアルの治世の第二年、ネブカドネツアル王は夢を見て胸騒ぎを覚え、寝付けない夜をすごした。王が、占い師、呪術師、まじない師、学者を招集して、彼の夢を告げるように、と命じると、彼らは王の前に立った。王は彼らに言った、「私は夢を見た。この夢をわかろうとして、私は胸騒ぎを覚えた」

学者たちは王に語った。「まずその夢を私どもにおっしゃってください。そうしたらその意味を申し上げます」

王は答えて学者たちに言う、「私の思いは堅い。お前たちが夢とその意味を私に知らせなかったら、お前たちは八つ裂きにされ、お前たちの屋敷は瓦礫の山と化するのだ。しかし、夢とその意味を明らかにしてくれたら、贈り物、ほうび、名誉をたんまりとらせよう。だから、夢とその意味を私に示してくれ」

彼らはもう一度答えて言った、「王が私どもに夢を話して下されば、私どもが意味を示しましょう」

王は答えて言った、「私にははっきりわかっている。お前たちは、私の思いが固いことを見てとって、時をかせごうとしているのだ。お前たちは、私にけしからん嘘を言おうと申し合わせ、時が変わるのを待とうというのだ。だが、私に夢を話してみよ。そうしたら、お前たちがその意味を私に示せることが私にもわかろう」

学者たちは王に答えていった、「王のお求めに応じることのできる者はこの地上におりません。どんなに偉大で強力な王といえども、このようなことを占い師、呪術師、学者に要求した者はないのです。王がお尋ねになっているものは難題で、人間どもとは住処を共にされぬ神々でもない限り、それを王にお知らせできる者は他にありません」

王はこれに対して烈火のように怒り、バビロンの賢者たちの皆殺しを命じた。勅令が出て、賢者たちの処刑が始まり、ダニエルとその同房たちも処刑ということになった。

ネブカドネツアル王は、夢の解き明かしの前に自分が見た夢の内容をまず知らせるよう要求しています。それができたのであれば夢判断の内容も信じることができると、もっともなことを言っています。たまらないのは学者たちです。他人の夢の内容など解るはずもなく、皆殺しにされるのですから。

ダニエルは同僚の命を救うべく神に祈ると、夜の幻を通してその秘儀が伝えられ、王の前に立ちます。

王はダニエルに言った、「お前は、私が見た夢とその意味をほんとうに私に知らせることができるのか」

ダニエルは王に答えて言った、「王がお尋ねになっている秘儀は、賢者、呪術師、占い師などには王に申し上げることはできません。しかし、秘儀を明かしてくださる神が天におられます。そのお方が、終わりの日に何が起こるかをネブカドネツアル王に知らせて下さったのです。この秘儀が私に啓示されたのは、あらゆる生物にまさる知恵が私に備わっているからではなく、王にその夢の意味を知らしめ、あなたをご自分の胸中の思いを知るように、ということなのです」

ダニエルは「予言者」と「預言者」の違いを語っています。賢者、呪術師、占い師などの「予言者」は「知恵」にたよっているのに対し、「預言者」は神からの啓示を語っているのです。

ダニエルは王が見た夢の内容を語ります。

「あなたの夢、床上であなたの頭の中を駆けめぐった幻はこうです。王よ、床上で心に浮かんで来たあなたの思いは、これから先どうなるか、ということなのです。王よ、あなたがじっと眺めておられると、どうでしょう、巨大な像が一つ現れました。この像は大きく、その輝き様はすさまじく、あなたの真向かいに突っ立って、恐ろしい様子を見せていました。その像は、頭が純金、胸と腕が銀、腹と腿は青銅、脛が鉄、足は一部が鉄、一部はタイルでした。あなたがじっと眺めておられると、しまいには一つの石が人手によらず切りだされ、鉄とタイルでできたこの像の足を叩き、粉々に砕きました。やがて、鉄、タイル、青銅、金銀も一緒に砕け、夏の脱穀場のもみ殻のようになり、風にさらわれて行き、その跡形もありませんでした。像を叩いた石は大山となって全地を覆いました。以上が夢で、これから王にその意味を申し上げます」

バビロニア帝国の王ネブカドネツアルが見た夢の内容を語った後、ダニエルは王が見た像の頭がバビロニア帝国であると語ります。そしてバビロニア帝国以降に覇権を握る国々の特徴を解説します。その預言は後に、メディア・ペルシャ帝国（胸と腕）、ギリシャ（腹と腿）、ローマ（脛と足）として成就します。バビロニア帝国を含めたそれらの国々がもみ殻のように風にさらわれ、跡形もなくなるということは、それらの国々から派生した国々がほぼ同時に無くなる時が来るということです。現在該当するのはローマ帝国の復活版であるヨーロッパ共同体EUやバチカン。そしてイラク（バビロニア）、イラン（ペルシャ）などです。

ダニエル書2章の44節から、2章最後の節である46節までを転記します。

「この王たちの治世に、天の神は永久に消滅することのない王国を興されます。その王国は他民族に渡されることはなく、これらの王国をすべて砕いて滅ぼし、自らは永久に続きます。山から一つの石が人手によらず切りだされて、鉄と青銅とタイルと金銀を砕くのをご覧になったのはそういうことです。大いなる神は、今後なにが起こるかを王に知らされたのです。この夢は確かです、その解釈も信頼していただけるものです」

すると、ネブカドネツアル王は床に顔をすりつけてダニエルに敬意を表し、彼にささげ物と香を供えるよう命じた。続いて、王はダニエルに言った、「あなたがこのような秘儀を明らかにできたからには、あなたたちの神こそは神々の中の神、王たちの君主、秘儀を啓示される方にまちがない」それから、王はダニエルを要職に任じ、数多の豪華な贈り物を彼に与え、バビロン州全体を治めさせ、バビロンのすべての賢者を管轄する長官にたてた。さらに、ダニエルの求めを容れて、王はシャデラク、メシャク、アベデネゴにバビロン州の統治を命じた。ダニエル自身は王宮にとどまった。

「この王たちの治世に」とは、バビロニア帝国の王であるネブカドネツアルから始まり、メディア・ペルシャ帝国、ギリシャ、ローマ、ローマから派生したEUの存在する現在までの期間です。つまり「永久に消滅することのない王国」とは、紀元前603年から現在に至るまで存続し続け、なおかつ「他民族に渡される」事の無かった日本一国だけが該当します。ただし日本は2500年の歴史上で一度だけ他民族に渡されそうになったことがあります。第二次世界大戦でアメリカに負けた時です。けれど国体は維持し、戦後一時的にGHQが国内をうろついていたので他民族に渡されたとはまでは言えないでしょう。一つの石とは日本のことなのです。

ところで、一つの石で表される日本がやがて大山となって全地を覆い、永遠に続くというネブカドネツアル王の夢の内容は、君が代の歌詞の意味と似ていますよね。歌詞の中の「さざれ石の巖となりて」とは、もともと小さな石だったのですが、長い年月をかけて回りの小石の欠片の間隙を炭酸カルシウムや水酸化鉄が埋めることによって、一つの巨大な岩の塊に変化した物の事だからです。

君が代には二重の意味があり、表の意味不明な歌詞に対して裏に本当の意味があるとの説があります。裏の意味は、君が代の歌詞の発音をヘブライ語に訳すると、「立ち上がれ、神を讃えよ。神の選民 シオンの民。選民として 喜べ。人類に救いが訪れ、神の預言が成就する。全地あまねく 宣べ伝えよ」だそうです。意味不明とされている表の意味がダニエル書2章の預言からきていたとしたら愉快ですよ。

では「一つの石」で現わされる「永久に消滅することのない王国」が「人手によらず切りだされる」とはどういう意味なのでしょう。ティンデル聖書注解「ダニエル書」の著者であるジョイス・G・ボールドウィンによると、『「人手によらずに切りだされた石」とは、神の計画を成し遂げるために神によって備えられ運ばれて来た』との意味になるとのことです。私も同意見です。では具体的になにが備えられ、なにが日本に運ばれて来たのでしょうか。その答えはやはり「この王たちの治世に、天の神は永久に消滅することのない王国を興されます」との預言にあります

。つまり、その永久に消滅することのない王国（日本）を創った王様がネブカドネツアル王と同時代に存在しているはずなのです。

そんな人物が一人います。

日本の建国記念日は神武天皇が初代天皇として即位した紀元前660年2月11日を記念したものです。したがって「神によって備えられ、運ばれて来たもの」とは神武天皇のことです。日本書紀によると神武天皇が崩御なされたのは紀元前585年4月9日なので、ダニエルがネブカドネツアル王の夢判断をしているまさにその時にも、神武天皇は日本で生きていたのです。

「神日本磐余彦尊」（かむやまといわれひこのみこと・後の神武天皇）が、モーセの祝福文に従って一つの国を建国するために、アッシリアから日の昇る東の果てを目指して旅立ったいきさつは「本編」に記述したので詳しくは説明しませんが、

「君が代は」→ 神武天皇から始まる日本は。

「千代に八千代に」→ 一代20年と小さく見積もったとしても八千代は16万年になります。

「さざれ石の」→ まさに神武天皇は神によって備えられた「小石」で、後に日本と呼ばれる土地に運ばれて来たといえるでしょう。神によって運ばれて来た「一つの石」である神武天皇が、「さざれ石」のように縄文人達と結び付き、やがて長い年月のなかで一致団結することができたからこそ、モンゴル帝国の襲来を二度とも跳ね返すことができたのです。

「巖とな一りて」→ なにより重要なことは、マナセ族こそが聖書の主人公だということです。マナセ（マナセ族）やその兄弟であるエフライム（エフライム族）がヤコブやモーセから賜った祝福文の豊かさから比べると、ユダヤ族などは脇役にしか過ぎません。けれどマナセ族は紀元前6世紀のアッシリア捕囚以降、聖書の歴史上から突然姿を消したため、マナセ族に関する歴史上の記述も途絶えました。そのマナセ族が、日本国に姿を変えていたのです。そして「終わりの日に何が起るかを」知らせる預言の中で、再び主人公としての姿を現し、大活躍するのです。そして他の国、民族と結び付き「巖の大山」とな一りて、

「苔のむすまで」→永遠に日本国は続くのです。

そんな預言解釈は欧米の預言解説者達にとっては想定外だと思います。けれど様々な聖書の預言を素直に読み解くと、日本がポコポコ浮上してくるのです。

ではその日本が、鉄と青銅とタイルと金銀で現されるEU、バチカン。そしてイラク、イランを砕くとの意味はなんのでしょうか。日本はそれらの国全部を敵に回し、第三次世界大戦で勝利するともいうのでしょうか。

ネブカドネツアル王の夢に出てきたその像は、頭が純金、胸と腕が銀、腹と腿は青銅、脛が鉄、足は一部が鉄、一部はタイルでした。頭は重く、足は鉄とタイルが混じったもろい構造のとても不安定な像です。そして最後の時に一つの石（日本）が、鉄とタイルでできたこの像の足（EU）を叩き、粉々に砕きます。すると老朽したビルを爆破解体するように像は勝手に瓦解してゆくのです。その時、EUは神の計画によって日本に滅ぼされます。ただしヨーロッパ共同体が滅ぶのであって、EUを構成する国々がすべて滅ぶとまでは考えたくありません。

そのEUを日本が打ち砕くとはどういう意味なのでしょうか。どのような戦いなのでしょうか。

一言でいえば、欧米文化vs日本文化の戦いということです。それは欧米の新石器文化（狩猟＋農業）vs日本の縄文文化の戦いで縄文文化が勝利するということです。

新石器文化とは石器により「戦う文化」であり、農業によって自然界から自分に都合のよいものだけを「奪う」文化なのです。戦う男性中心の「勝って主人になるか負けて奴隷にされるか」の社会であり、勝ち組が負け組を見下す世の中と言い換えることもできます。

石器とは食料を得る目的で戦うための武器です。なので新石器時代の人骨には石器によって傷ついた骨が多数出土します。一方縄文土器は食料を料理し、守る器です。そのままでは食べることのできないドングリなどを料理することにより、自然に歩み寄り、自然と同化して生きていこうとする文化です。なので縄文時代の人骨は無傷なのです。

欧米文化の基幹を成す新石器文化とは、何度も何度も繰り返し続ける戦争により、→青銅器時代→鉄器時代と発展し武器をどこまでも進化させて行く方向性を持っています。そこには江戸時代のように、鉄砲は武器として卑怯だとして刀に戻るという歯止めはないのです。したがって人類を何十回でも滅亡させうる多量の大陸間弾道核ミサイルを生み出した欧米文化こそが、新石器文化の鉛直線上にあるということが言えるのです。対する日本独自の縄文文化については後に詳しく解説します。

今ここで言えることは、マナセの支族が日本という国家を築いたことにより、「縄文文化」は「新石器文化」による侵略から守られた結果、現在に至っても縄文文化が私たち日本人の心の奥底で生き続けることができたということです。端的に言うと、日本に織田信長が存在したからこそ、縄文人の文化を引き継いできた日本人が存続できたのです。織田信長はキリスト教国が自分以上に邪悪なことに気がついていました。結果、一万五千年以上前から2500年前まで続いたとされる縄文文化が、日本が、キリスト教国から守られてきたのです。

その日本が欧米文化に勝つということは、欧米文化的な意味で勝つということではありません。例えば核兵器でEUを滅ぼすといった「新石器文化」的手法ではなく、縄文文化的手法で勝利するのです。

ダニエル書2章の説明が長くなってしまいました。先を急ぎます。

ダニエル書は12章までありますが、「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者」に関する聖句は8章と9章の一部、そして12章が該当します。以下、「末日」を定義するために9章の一部を、日本聖書協会口語訳で転記し随時解説していきます。

「あなたの民と、あなたの聖なる町については、70週が定められています。これはとがを終わらせ、罪に終わりを告げ、不義をあがない、永遠の儀をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なるものに油を注ぐためです。それゆえ、エルサレムを立て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもって、建て直されるでしょう。その六十二週の後にメシヤは絶たれるでしょう。ただし自分のためにではありません。またきたるべき君の民は、街と聖所とを滅ぼすでしょう。そしてその終わりまで戦争が続き、荒廃は定められています。彼は

一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう。また荒らすものが憎むべき者の翼に乗って来るでしょう。こうしてついにその定まった終わりが、その荒らす者の上に注がれるのです。」（ダニエル9：24～27）

まず、「あなたの民と、あなたの聖なる町については、70週が定められています」との意味です。

「あなたの民と、あなたの聖なる町」とありますから、それはダニエルの民とダニエルの町ということです。当時はすでに十支族は聖書の歴史上から消えていましたから、あなたの民とはユダヤ民族のことで、あなたの町とはイスラエルです。日本は関係ありません。でも、最後の最後に日本が絡んでくるのですが。

「70週が定められています」の「定め」とは原語で切り取るという意味があります。切り取るからには切り取るための素材があるはずです。その素材からユダヤ民族とイスラエルの町に関する70週の預言が切り取られたということです。だとすると、切り取られた後の素材にはユダヤ民族とイスラエルの町は含まれないと考えることができます。70週の預言が切り取られた後の素材とは、つまりユダヤ人以外の全世界の民族および、イスラエルの町を除いた世界の町が該当します。

70週とは70周年のことです。つまり70年×7＝490年を表します。（エゼ4：6、民14：34参照）

70×7の意味についてはイエスが答えています。

そのとき、ペテロがイエスのもとに来て言った、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか、七たびまでですか」。イエスは彼に言われた、「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい」（マタイ18：21・22）

この聖句は、同じクリスチャンならば相手を490回でも許しなさいという意味ではありません。なぜならその教えの直前の節で以下のように言っているからです。

「もしあなたの兄弟が罪を犯すなら、行って、彼とふたりだけの所で忠告しなさい。もし聞いてくれたら、あなたの兄弟を得たことになる。もし聞いてくれないなら、ほかにひとりふたりを、一緒に連れて行きなさい。それは、ふたりまたは三人の証人の口によって、すべてのことがらが確かめられるためである。もし彼らの言うことをきかないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい」（マタイ18：15～17）と、実にリアルで実利的なルールを語ってます。仏の顔も三度までということです。つまり同じ仲間であるクリスチャンを許す回数は三回であり、490回ではありません。

「七たびを七十倍」とは明らかにダニエル書の490年について語った言葉です。つまりキリストが「ゆるす」相手はクリスチャンではなく、別の何者かです。

70週の預言はユダヤ人に対する預言なので、イエスが許す相手はユダヤ人です。つまりイエ

スがユダヤ人を許す期間は490年までだということです。ではその490年とは、具体的に何時から何時までなのでしょう。またその490年という期間にはどんな意味が込められているのでしょうか。その期間を知るための重要なヒントを、イエスは「王が僕（しもべ）たちと決算する」（マタイ18：23）の例え話の中で語っています。以下の聖句は、「七たびを七十倍するまでにしなさい。」というイエスの言葉と、「王が僕たちと決算する」例え話が「それだから」でつながっていることを示すために、マタイ18：21～34までを以下に記載しました。

そのとき、ペテロがイエスのもとに来て言った、「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯した場合、幾たびゆるさねばなりませんか、七たびまでですか」。イエスは彼に言われた、「わたしは七たびまでとは言わない。七たびを七十倍するまでにしなさい。それだから、天国は王が僕たちと決算をするようなものだ。決算が始まると、一万タラント（六千億円）の負債のある者が、王のところに連れられて来た。しかし、返せなかったので、主人は、その人自身とその妻子と持ち物全部とを売って返すように命じた。そこで、この僕はひれ伏して哀願した、『どうぞお待ちください。全部お返しいたしますから』。僕の主人はあわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった。その僕が出て行くと、百デナリ（百万円）を貸しているひとりの仲間に出会い、彼をつかまえ、首をしめて『借金を返せ』と言った。そこでこの仲間はひれ伏し、『どうか待ってくれ。返すから』と言って頼んだ。しかし承知せずに、その人をひっぱって行って、借金を返すまで獄に入れた。その人の仲間たちは、この様子を見て、非常に心をいため、行ってそのことをのこらず主人に話した。そこでこの主人は彼を呼びつけて言った、『悪い僕、私に願ったからこそ、あの負債を全部ゆるしてやったのだ。わたしがあわれんでやったように、あの仲間をあわれんでやるべきではなかったか』。そして主人は立腹して、負債全部を返してしまうまで、彼を獄吏に引きわたした。（マタイ18：24～34）

「一万タラント」とは、日当一万円として現在の紙幣価値に換算すると6000億円となり、その金額は個人では決して返すことのできない負債を表します。その意味は原罪などというキリスト教会が信者を従わせるためにでっち上げた罪ではありません。決して返すことのできない負債とは、決して守りきることのできない戒律のことです。つまり十戒です。特にその四番目の戒めである安息日を守ることは無理なのです。一週間に一日くらいはのんびり休みましょーというような生易しい戒律ではないからです。

安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。（出エジプト20：9、10）

安息日を守りなさい。それは、あなたたちにとって聖なる日である。それを汚す者は必ず死刑に処せられる。だれでもこの日に仕事をする者は、民の中から断たれる。（出エジプト31：14）

これでは毎週安息日のたびに死刑に該当する罪が加算されて行くことになります。決して返す

このできない一万タラントの負債とは、決して守ることのできない安息日の律法と同じなのです。

「その負債を免じる」行為とは、イエスが十戒を破棄した行為を意味します。イエスが殺された理由の一つが、安息日の戒律を、「一週間に一日くらいはのんびり休みましょー」レベルに下げたことでした（マタイ12：1～14 & ヨハネ5：8～18）。イエスは「父（神）はだれをもさばかない。さばきのことはすべて、子（イエス）にゆだねられたからである。」（ヨハネ5：22）と宣言し、主人が僕の負債を免じたように、旧約の民を十戒（罪）から解放したのでした。そして十戒のかわりとして、永遠の儀をもたらす福音を説いたのです。

したがって、僕のその後の態度に立腹した主人が再度「彼を呼びつける」という行為とは、イエスの再臨を表すことになります。イエスの再臨とは、イエス様がニコニコして「さあ天国が来ましたよー、みんな仲良くしましょー」と平和を告げることはありません。なにしろ「血染めの衣」（黙示録19：13）をまとっているのですから、キリストを十字架に架けて殺したローマ帝国の末裔であり、植民地政策により他国の富を収奪した「悪い僕」であるEU諸国は震え上がるべきでしょう。

では、例え話の「悪い僕」にとっての「末日」はいつでしょう。

それは僕が決算の日その負債を免じられてから、再度主人に呼びつけられた日です。僕が決算のために出頭した日はあらかじめ定められていたのですが、二度目は突然呼び出されました。僕はなぜ突然呼び出されたのかも理解していなかったことでしょう。したがって僕にとっての「末日」とはあらかじめ定まっていた日ではなく、不定期の執行猶予期間の後であることを表しています。言葉を換えれば、僕が再度主人に呼び出される日をあらかじめ知ることができなかったように、「末日」もあらかじめ特定できないということでもあります。

「末日」はあらかじめ特定することができないのだ、ということイエスは次のように語っています。

「その日、その時はだれも知らない。天の御使いたちも、また子（イエス・キリスト）も知らない、ただ父（神）だけが知っておられる。」（マタイ24：36）

「末日」とは、なにが終わる日なのかの答えが出ました。「末日」とは、不定期の猶予期間の終わる日なのです。はたしてその不特定の期間とは、現時点から100年先なのでしょうか、それとも一万年先なのでしょうか。

末日は「あらかじめ特定することのできない日」だということは、その「末日」が何年何月何日であるかを特定できるのは、その日が来た後だということです。つまりその日を特定出来るのは「末日」が来た後なのですから、現時点で末日を特定できる場合は現時点以前に末日が始まっていなければなりません。したがって末日を特定できたということは、100年先なのか一万年先なのかどころか、一日先でもないのです。もうすでに末日はスタートしています。

同じことを別の言葉でダニエル書は語っています。

「ダニエルよ、あなたは終わりの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう」（ダニエル12：4）

「この言葉」とはダニエル書の預言の言葉のことです。その預言の意味が解かれるのは「終わりの時」が来てからだと言っています。「終わりの時」とは末日のことであり、それは不定期の執行猶予期間の終わる時のことですから、その時が来るまでダニエル書の正しい解釈は「秘められ、封じられ」ということになります。僕にとって主人に突然呼び出された理由がその時点では分からなかったように。

逆にいえば、今ここで私が行っているダニエル書の解釈によりダニエル書の封印を解いたのであれば、今現在、すでに「末日」に突入していることとなります。

そして「多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知識が増すでしょう」との意味ですが、ダニエル書の預言を解くためには「あちこちと探り調べ」なければならないということです。実際、知識増しますよー。

「末日」とはそういう意味で、ダニエル書とはそういう預言書なのです。

突然余談になりますが、私はキリスト教徒です。一人ぼっちのキリスト教徒です。なぜならパウロを否定しているからです。私の知る限りパウロを否定するキリスト教組織は日本に存在しません。ですから特定のキリスト教組織で活動することは私にはできません。その代わり自由です。特定のキリスト教組織の教義に縛られることがないからです。おかげで様々なキリスト教組織の書籍から学ぶことができる利点があります。「本編」では、あの悪名高きエホバの証人の資料を用いている個所もあります。彼らの預言解釈はご都合主義で、聖書の預言を「これでもか」というくらい曲解しています。けれど旧約聖書の時代背景に関する書籍だけは十分信頼するに値するものなので引用しているのです。

単なる詐欺集団にしかすぎない統一教会等の資料は用いませんが、まじめに聖書を読解しようとしている組織の書籍ならば何でもござれです。

これから用いる書籍は大正十五年七月八日に発行された「ダニエル書講解」です。なにしろ大正の時代に書かれていて読みにくいので今の言葉に直して引用している部分があります。読みにくい一例をあげれば、「而して是等の記録を総合する時に、アルタシヤスタ王（わう）の即位（そくゐ）は紀元前四百五十四年の秋なりしことを學ぶことが出来る。故（ゆゑ）に彼の治世の第七年は紀元前四百五十七年であつた。この年は他の信すべき年代學者も亦一致する處である。即（すなは）ちアイザック・ニュートン氏は有名（いうめい）なる古書によつて数種の年代記を調べたるに、アルタシヤス王の第一年は何れも紀元前四百六十四年であつたと云つてゐる。故（ゆゑ）にアルタシヤス王（わう）の第七年が紀元前四百五十七年であることは最早疑ふ餘地がないのである。」（182ページ）読みにくいですよ。

読みやすく簡潔に平成言葉に翻訳すると、「あのニュートンと同じ結論だし、アルタシヤス王の第7年は紀元前457年ということで間違いありません」となります。

ちなみに万有引力を発見したアイザック・ニュートンは、その生涯をダニエル書の預言解釈に

ささげました。彼は晩年こう語っています。「これを完全に解明することは、ひとりの人間や一時代では不可能だろう」と。

難しいはずです。イエスとダニエルは、「末日」とは具体的に何年何月何日であるかを、あらかじめ特定することなどはできない」と語っているからです。

ダニエル書の預言解釈に戻ります。

「あなたの民と、あなたの聖なる町については、70週が定められています。これはとがを終わらせ、罪に終わりを告げ、不義をあがない、永遠の儀をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なるものに油を注ぐためです。

70週=490年の間になにが起こるのか、三つのことが預言されています。

その①、キリストによる旧約（十戒）からの解放→新約（福音）時代への移行があると預言されています。「罪（十戒）に終わりを告げ、不義をあがない（旧約破棄の代償として、キリストの十字架上の死=あがない、があった）、永遠の儀（福音）をもたらし」という意味だからです。それは救世主キリストの数年に渡る活動期間を表しています。意外と短い活動期間ですよ。イエスが大工の職業をやめ、救世主として活動を始めてから十字架で死を迎えるまでの期間はたったの2～3年程度といわれています。

その②、幻と預言者が一定期間、封じられます。「幻と預言者を封じ」とは、そういう意味です。その期間とは旧約最後の書であるマラキ書から、イエスがキリストとして活動を始めるまでの空白期間が該当します。なぜなら旧約聖書と新約聖書の間には預言は無かったからです。だって旧約聖書と新約聖書の間にはページが無いのですから。あたり前のようであたり前のことではないのですよ。その空白期間は「沈黙の400年」とか「沈黙の時代」と名付けられています。この期間に預言者は一人もいなかったからです。

つまり70週=490年のうちの、約400年間「幻と預言者」が封じられていたんです。

ではマラキ書の最後に、どんな言葉が記述されているのでしょうか。マラキ書4章は旧約聖書最後の章です。そのマラキ書4章の内容は旧約聖書を集約しており、かつ新約聖書にバトンとタスキを渡す事が示されているので、以下4章すべてを転記します。

万軍の主は言われる、見よ、炉のように燃える日が来る。その時すべて高ぶる者と、悪を行う者とは、わらのようになる。その来る日は、彼らを焼き尽くして、根も枝も残さない。しかしわが名を恐れるあなたがたには、儀の太陽がのぼり、その翼には、いやす力を備えている。あなたがたは牛舎から出る子牛のように外に出て、とびはねる。また、あなたがたは悪人を踏みつけ、わたしが事を行う日に、彼らはあなたがたの足の裏の下にあって、灰のようになると、万軍の主は言われる。

あなたがたは、わがしもべモーセの律法、すなわちわたしがホレブで、イスラエル全体のために、彼に命じた定めとおきてとを覚えよ。

見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす。

彼は父の心をその子供たちに向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。

前半の聖句はイエスが預言した、「世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きな艱難」が過ぎ去った後の世界です。それは悪人がすべて駆逐された、とてもおめでたい日なのです。「儀の太陽」が日本のことだとすると、日本が最新医療機器を乗せた飛行物体で、生き残った人々を助けてまわるということになります。多くの国の人々を救い、「さざれ石」のように多くの国と一体となることができたなら素敵ですよ。その悪人をすべて駆除する「炉のように燃える日」が過ぎ去った時とは一体どんな世界なののでしょうか。イメージとしては終戦後、「リンゴの歌」が流行った時代に相当します。「あーかーいーリンゴに、口びーるよせて～ だーまーあーって見ている あーおい空～」の歌声に励まされて日本は復興を成し遂げたのです。私としてはその「大艱難」が過ぎ去った後に流れる歌としては、いつも何度でも」がピッタリはまると思っています。ぜひナターシャ・グジーが歌う「いつも何度でも」を聞いてみてください。そこには大艱難が過ぎ去った後の明るい未来が示されています。

その明るい未来を示した聖句の後に、「あなたがたは、わがしもべモーセの律法、すなわちわたしがホレブで、イスラエル全体のために、彼に命じた定めとおきてとを覚えよ」との言葉があります。それはモーセの十戒を忘れるなどの命令でもあります。それはとても重要な聖句です。なぜならそれは①の預言が成就するための必須条件だからです。せっかくイエスが十戒を破棄すると宣言しても、旧約の民が「沈黙の400年」の間に十戒をすっかり忘れていて、「えっ、十戒って何？安息日の律法って何のこと？えっ、あんたが十戒を破棄するって。なんだか知らないけど、好きにしたら。」では物語が進まないからです。

そして490年の間に生じる③番目の預言、「見よ、主の大いなる恐るべき日が来る前に、わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす」があります。「あれっ、その聖句はマラキ書の聖句であってダニエル書の聖句ではないのではないか」と思われたかもしれません。実は490年の間に、「いと聖なるものに油を注ぐ」ということが起こるとしたダニエル書の預言は、マラキ書の、「わたしは預言者エリヤをあなたがたにつかわす」との預言と同じ意味なのです。というか、二つの聖句は一体となって、意味をなすのです。二つの聖句をつなぐと、「いと聖なるもの（イエス）に油を注ぐ（聖任する目的で）預言者エリヤをあなたがたにつかわす」となります。

預言者エリヤとはバプテスマのヨハネのことです。なぜならイエスが次のように言っているからです。

「すべての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までである。そして、もしあなたがたが受け入れることを望めば、この人こそは、きたるべきエリヤなのである」（マタイ11：13・14）

マラキ書4章を転記する際に私が、「マラキ書4章の内容は旧約聖書を集約している」と言ったのは、イエスが語った上記の「すべての預言者と律法とが預言したのは、ヨハネの時までで

ある。」との言葉から来ています。その言葉は以下のように読み替えることができます。「すべての預言者と律法とを集約したマラキ書4章は、バプテスマのヨハネの時代までを預言している」。なぜなら、「この人（バプテスマのヨハネ）こそは、きたるべきエリヤなのである」から。

バプテスマのヨハネによってイエスはヨルダン川で洗礼を受けました。そしてイエスは大工さんの職業からキリスト（救世主）としての道を歩き始めたのです。つまり預言者エリヤ（バプテスマのヨハネ）がつかわされたのは、いと聖なるもの（イエス）に油を注ぐ（バプテスマを施す）ためだったのです。旧約聖書時代、王や祭司を聖任するために油を頭に注ぐ儀式が行われていました。油を注ぐのと、水で洗礼を施すのとでは儀式が違うと思われるかもしれませんが、油は高価なので、貧乏なバプテスマのヨハネは川の水で代用したのです。ともあれ、イエスの言葉によりダニエル書とマラキ書の預言が結び付きました。

ではマラキ書の「彼（エリヤ＝バプテスマのヨハネ）は父の心（神）をその子供たち（人類）に向けさせ、子供たちの心をその父に向けさせる。」とはどういう意味なのでしょう。

その意味はヨハネがイエスに洗礼を施すことにより、神と人類の仲立ちとしてのキリストが誕生するという事なのです。

そして旧約聖書の最後の聖句である「これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。」との言葉があります。つまりこのままだと神の呪いが降りかかるけれど、バプテスマのヨハネの洗礼により神と人類の仲立ちとしてのイエスキリストが誕生して、呪いは打ち消されるという意味です。そしてその言葉は新約聖書最後の聖句と対をなしているのです。

では、新約聖書最後の聖句を見てみましょう。ヨハネの黙示録22章21節です。

主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように。

旧約聖書が「呪い」という言葉で終わっているのに対し、新約聖書は「恵み」という言葉で終わっています。神の呪いをイエスの恵みが打ち消すと解釈してよいでしょう。

ダニエル書に戻ります。

「あなたの民と、あなたの聖なる町については、70週が定められています。これはとがを終わらせ、罪に終わりを告げ、不義をあがない、永遠の儀をもたらし、幻と預言者を封じ、いと聖なるものに油を注ぐためです。

上記の聖句が解けました。これからは超難解と言われる「70週の預言」がスラスラ解けていきます。なぜならそれに続く預言は490年の間に起こる上記三つの預言成就の年を確定しているからです。

それゆえ、エルサレムを立て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、

七週と六二週あることを知り、かつ悟りなさい。その間に、しかも不安な時代に、エルサレムは広場と街路とをもって、建て直されるでしょう。

「それゆえ」とは490年の間に起こる三つの預言成就を指しています。その三つの預言を時系列に並べ直してみます。

①、まず、「幻と預言者を封じ」があります。それは約400年の間「幻と預言者が封じ」られていた、旧約聖書と新約聖書間の空白期間でした。

②、そして、「いと聖なるものに油を注ぐ」=バプテスマのヨハネによるイエスの洗礼により、旧約聖書からタスキとバトンを受け継いだ新約時代がスタートしたのです。

③、最後に、「とがを終わらせ、罪に終わりを告げ、不義をあがない、永遠の儀をもたらす」、イエスの数年間に渡る活動期間があります。その間、キリストは「罪（十戒）に終わりを告げ、不義をあがない（旧約破棄の代償としての十字架上の死=あがない）、永遠の儀（福音）をもたらす」、という活動を行ったのでした。

ここで問題なのは、その基準となる年です。先ほど約400年などというアバウトな年数を書いたのは、旧約聖書最終章であるマラキ書4章が書かれた年代に諸説ありすぎだからです。

基準点となる年が解らなければ70週の預言は意味をなしません。その基準点が以下の聖句に示されています。

「それゆえ、エルサレムを立て直せという命令が出てから、メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六二週あることを知り、かつ悟りなさい。」

週とは、週年のことなので、七週+六二週=7×7年+62×7年=49年+434年=483年となります。

つまり、「エルサレムを立て直せという命令」が基準となる年で、「メシヤ（ヘブライ語で油を塗られた者、つまりヨハネの洗礼を受けたキリスト）なるひとりの君が来る」まで483年の期間があるということです。

では「エルサレムを立て直せという命令」はいつ発せられたのでしょうか。大正15年に書かれた「ダニエル書講解」では、基準年が「紀元前四百五十七年」にあるとし、その根拠を8ページに渡って記載しています。そしてその最大の根拠は、「あのニュートンと同じ結論だし、アルタシヤス王の第7年は紀元前457年ということで間違いないですう」ということです。

エルサレムを立て直せという命令は、新バビロニア王国を倒して、バビロンに捕囚となっていたユダヤ人を解放したペルシャのクロス（キュロス）王や、その後のダリヨス王、そしてアルタシヤスタ王によって、計三回発せられてます。その中で、「エルサレムは広場と街路とをもって、建て直されるでしょう。」との預言どおりに、神殿だけではなく、広場と街路も建て直されたのはアルタシヤスタ王の第七年、王の命をうけてエズラがバビロンからエルサレムへ携えて行って布告した時です。それが基準となる紀元前457年なのです。70週の起算点となる年が明確となったので、これからは約400年などと言うアバウトな言い方をしなくて済みます。

では、「七週と六二週あることを知り、かつ悟りなさい。」と、わざわざ69週を7週と62週に分けたのにはなにか意味があるのでしょうか。7週は7×7=49年で、神殿と街並みを復興

させるという命令が出てから49年後、実際にエルサレムが神殿と街並みとをもって建て直された年数を表します。

62週は $7 \times 62$ で、434年となり、それが沈黙の400年にあたります。つまり「沈黙の434年」が正しいのです。

①の「幻と預言者が封じ」られていた期間が確定しました。434年です。

その沈黙の434年は②のイエスの洗礼で幕をとじます。

さて、計算してみましょう。

「メシヤなるひとりの君が来るまで、七週と六二週あることを知り、かつ悟りなさい。」

基準点は紀元前457年です。それから七週後＝49年後（紀元前408年）から沈黙の434年が始まります。

沈黙の434年が明けるのが、紀元前408年の434年後ですから、 $(434 - 408) + 1$ で、紀元27年となります。なぜ1を足すのかというと、紀元0年が存在しないために一つ数字がずれるのを戻すためです。つまり紀元27年に大工さんだったイエスは洗礼を受けて「メシヤなるひとりの君」キリストとしての道を歩み始めたのです。西暦1年頃にイエスは誕生していますから、「イエスが宣教をはじめられたのは、年およそ30歳の時だった」（ルカ3：23）と記述されている史実とも一致します。（※一般論としては、実際にイエスが生まれたのは紀元前4年と言われてますけどまあ、どうでもいいです）

②の「いと聖なるものに油を注ぐ」年が確定しました。西暦27年です。

そして③、イエスの数年間に渡る活動期間があります。一体何年だったのでしょうか。

「その六十二週の後メシヤは絶たれるでしょう。ただし自分のためにではありません。またきたるべき君の民は、街と聖所とを滅ぼすでしょう。そしてその終わりまで戦争が続き、荒廃は定められています。彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう。」

62週とは「沈黙の434年」であり、その後にはヨハネの洗礼によるイエスのキリストとしての誕生があります。そして「メシヤが絶たれる＝キリストが十字架上で絶たれたと事」を預言していますから、その期間はキリストの活動期間を意味しています。つまり「その六十二週の後メシヤは絶たれるでしょう。」とは、キリストの活動期間を意味しています。その活動期間の具体的な年数を確定するのが、「彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう」との、聖句です。

「週の半ば」とは、一周年の半分、 $1 \times 7 = 7$ 年の半分ですから、三年半の期間を表します。ならば「犠牲と供え物とを廃する」とはどういう意味なのでしょう。

キリストが十字架上で絶たれた時、一つの事件がありました。聖句を引用します。

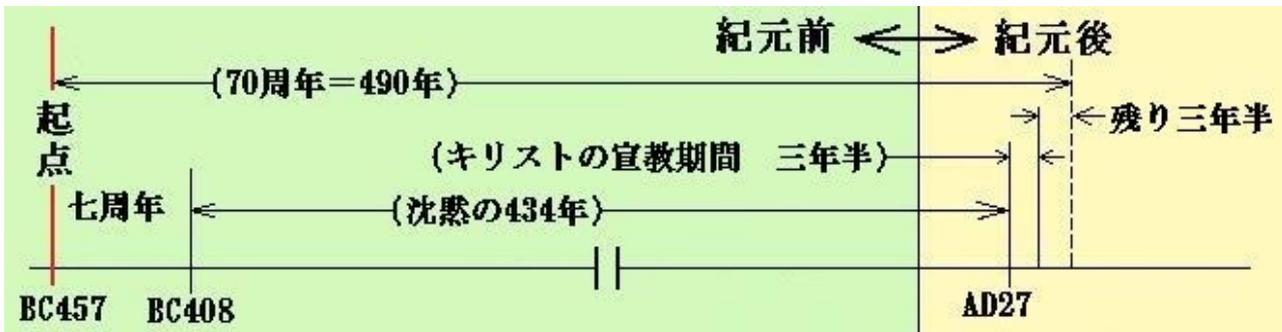
「イエスはもう一度大声で叫んで、ついに息をひきとられた。すると見よ、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」（マタイ27：50、51）

それは文字通り、新約時代の幕開けを象徴する出来事でした。それまで神と人とを隔てていた神殿の幕がイエスのあがないの死により取り除かれたのです。あがないとは犠牲の代償を捧げる

ことで、罪のつぐないをすることですから、イエスの死によって「犠牲と供え物が廃された」のです。つまり「犠牲と供え物が廃された」とは、十戒を廃したキリストのあがないの死により旧約時代から新約時代にスイッチが切り替わったので、それまで神殿で行われていた罪をあがなう為の動物の犠牲と、初物の供え物などが不要となったことを現します。つまりあなたの家に神棚があるとすれば、そこにお供え物をする意味が無くなったということです。はるか2000年ほど前、西暦30年という昔に。

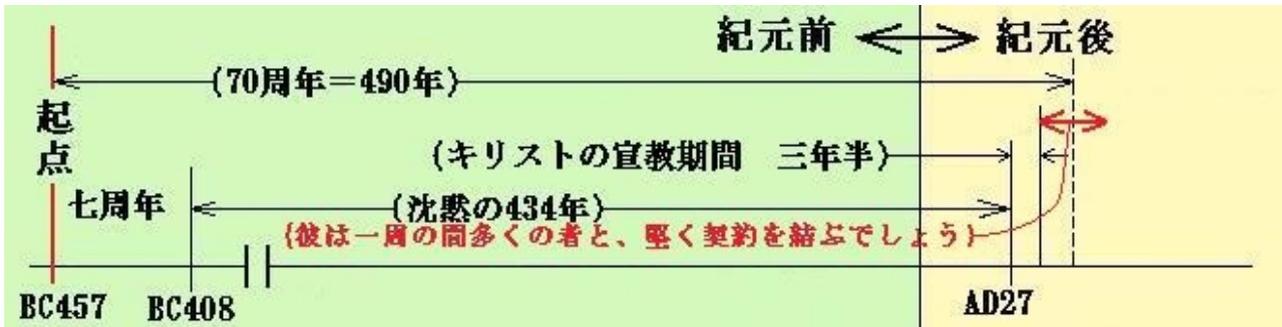
③のキリストの活動期間が確定しました。三年半です。

さて、これで70週、490年の残りの期間が三年半となりました。（下図参照）



残り三年半には何が入るのでしょうか。

残ったのは「彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう。」の預言です。入れてみましょう。（下図）



70周年から三年半飛び出てしまいました。でもこれでいいのです。

再度以下の聖句を意識を交えて転記します。

「その六十二週（沈黙の434年）の後（三年半後）にメシヤは絶たれる（十字架上の死）でしょう。ただし自分のためにではありません（ただしイエスの意思を引き継ぐ組織はありません）。またきたるべき君の民は、街と聖所とを滅ぼすでしょう（西暦70年のローマ軍による神殿破壊）。そしてその終わりまで戦争が続き、荒廃は定められています（ユダヤ人の集団自決で知られるマサダの戦いに象徴される、西暦66年から西暦73年まで続いたユダヤ戦争。～だけではなく、近代における中東戦争をも含む。なにしろイスラエルの街の終わりまでですから）。彼は一週の間多くの者と、堅く契約を結ぶでしょう（イエスは7年間、新しい契約を多くの人々と堅く結ぶでしょう）。そして彼はその週の半ばに、犠牲と供え物とを廃するでしょう（キリストの死による旧約の破棄＝旧約時代の終焉）。」

追記します。

「ただし自分のためにではありません」との聖句の意味は謎とされています。たとえば「旧約聖書翻訳委員会訳」によると、同聖句が「彼にはない」と原語に沿って簡単に訳されています。そしてその注記には「何がないのかははっきりしない。子孫ないし後裔者か」とあります。私は（ただしイエスの意思を引き継ぐ組織はない）と意識しました。

イエスの意思を引き継ぐキリスト教組織はたくさんあるだろうと思われるかもしれませんが、ないのです。カソリックなり、プロテスタントなりがイエスの意思を引き継いでいるとはとても思えません。魔女狩りを行い、クリスチャン同士で殺し合い、他民族を奴隷狩りして人間扱いしなかった歴史を持つ組織がイエスの意思を引き継いでいるはずがありません。イエスの意思を引き継ぐことのできた組織は存在しないのです。

その理由は、「天井裏のイエスキリスト」という短編小説の中で説明しているのでぜひ読んでみてください。電子出版で無料公開していますから。

誤解の無いように付け加えておきますが、イエスの意思を引き継ぐ組織は存在しないからといって、キリスト教会に属することが無意味だとは言ってません。ヨハネの黙示録の冒頭で語られているのは、末日に実在している「七つの教会」のことだからです。あなたが詐欺集団ではない教会組織に在籍しているのであれば、黙示録で語られている「七つの教会」のどれかに当てはまるはずです。

次の「またきたるべき君の民は、街と聖所とを滅ぼすでしょう。」の「君」とは、一般的な解釈ではアンティオコス・エピファネスが神殿に豚を投げ入れて穢したことだとされています。マニアックな話になりますが、彼は紀元前167年、エルサレムと街に甚大な被害をもたらしたものの（1マカベア1：31、38）、滅ぼしはしなかったという事実から、「街と聖所を滅ぼした」のは、一般的な解釈であるエピファネスではありません。答えはイエスが預言した神殿の破壊者であるローマ軍です。するとローマ軍が神殿を破壊した紀元70年は、70週の終りである紀元34年からはみ出してしまいます。でもそれでいいのです。続く聖句が「そしてその終わりまで戦争が続き、荒廃は定められています」とありますから。「そして」最終的にイスラエルの街が荒廃する「終わり」まで戦争は続くとされているのです。どのみち70週の中には収まりません。休戦中とはいえ、中東戦争は現在進行形で続いているのですから。

つまり70週の預言は、70週を超えたはるか未来に渡る預言だと解ります。

話を戻します。

イエスが新しい契約を多くの者と結ぶ7年間で、イエスがユダヤ人を許す期間である70週＝490年から三年半飛び出ってしまった理由は、70週の預言が490年で完結しないからです。けれどある意味完結しています。

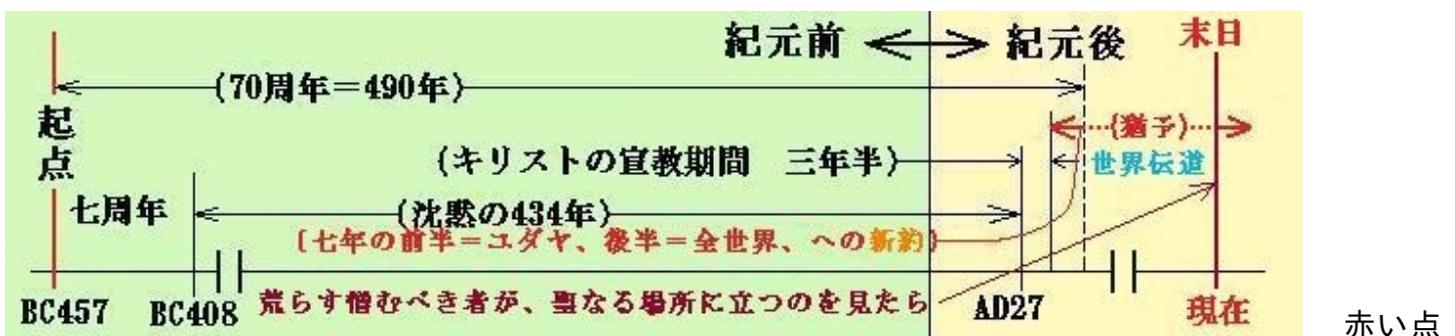
イエスの死後、弟子たちは三年半にわたってユダヤ人だけに福音を伝道します。けれどユダヤ人に対する伝道はある事件を境に、突然終わります。三年半の終わりに、ユダヤ人はその当時最も有名で最もイエスの意思を引き継いだステパノを石打ちの刑で殺したのです。最初の殉教者でした。ステパノがユダヤ人に殺されてから以降、使徒達以外の弟子はバラバラに散らばり、そこで当時のユダヤ人に対する福音の伝道は終わったのです。それはイエスが70×7年、ユダヤ人を許すとした時の終焉でした。70×7年後、福音はユダヤ人から全世界に述べ伝えられることとな

ったのです。（使徒6章～7章）

ここで思い出してもらいたいのですが、「70週が定められています」の「定め」とは原語で切り取るという意味があるということです。切り取るからには切り取るための素材があります。その素材とは世界です。つまり、世界と、世界の歴史からユダヤ民族とイスラエルの町に関する70週の預言が切り取られたのですから、切り取られた後の素材にはユダヤ民族とイスラエルの町は含まれません。70週の預言が切り取られた後の素材とは、ユダヤ人以外の全世界の民族および、イスラエルの町を除いた世界の町が該当します。何が言いたいのかというと、70週からはみ出た預言は、ユダヤやイスラエルの町に関する預言ではなく、世界に関する預言となるのです。

もうひとつ思い出してもらいたいのが、「この御国の福音は、すべての民に対してあかしをするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである」とのキリストの預言です。福音とは、いわば契約内容ともいえます。あたりまえの話ですが、契約内容に同意するから契約が成り立つのです。つまりはみ出した三年半の「新しい契約」締結期間は、福音（契約内容）が全世界に宣べ伝えられてから始まるということです。そしてそれがいつなのかを預言した聖句が「また荒らす者が憎むべき者の翼に乗って来るでしょう。こうしてついにその定まった終わりが、その荒らす者の上に注がれるのです。」との預言なのです。やっとこの預言にたどり着くことができました。

これで70週の預言の図がほぼ完成しました（下図）。後は末日に具体的な年月日を書き入れるだけです。



線部の期間に（猶予）とあるのは執行猶予期間の略です。「悪い僕」の例え話で、膨大な借金を免除されてから二度目に呼び出されるまでの期間に相当します。

その執行猶予期間はそのまま世界に対する福音の伝道期間でもあります。

そしてその世界伝道は、イエスが結ぶ新しい契約の七年間の間にあります。七年の前半である三年半の間は一部のユダヤ人との間に新しい契約が立てられました。残りの三年半は、世界中の民族と国家に対し福音が行き渡った後に始まります。それが私たちが生きている現在なのです。

ここで「本編」を読まれた方に誤解されたくないの一言付け加えますが、戦後70年が過ぎてから神と日本人個々との間に交わされる「新しい契約」と、上図の「新しい契約」とは別物です。上図の「新しい契約」はイエス・キリストが結ぶ契約であって、神が結ぶわけではないからです。

では、イエスが末日後、三年半の間に結ぶ「新しい契約」とは一体どんな契約なのでしょう  
か。

まず十戒の替わりに新しい戒めがあります。

「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互いに愛し合いなさい。わたしがあなたが  
たを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハネ13：34）

そして契約主であるイエスとの関係については、

「わたしはもう、あなたがたを僕（しもべ）とは呼ばない。僕は主人のしていることを知らない  
からである。わたしはあなたがたを友と呼んだ。わたしの父から聞いたことを皆、あなたがたに  
知らせたからである。」（ヨハネ15：15）

つまり友人として対等の関係だと言っています。そして上記の聖句で重要なのは、「わたしの  
父（神）から聞いたことを皆、あなたがたに知らせたからである。」との意味です。「えーっ、  
俺はそんなこと聞いたこともないよ。聖書なんて読んだこともないし」などと言わないでくだ  
さい。少なくとも、聖書を読もうと思えば読める環境にあなたは居ます。聖書を買えなくても図  
書館で借りたらいいし。現に今あなたは超難問とされる70週の預言解説を読んでいることで  
すし。

世界伝道が行われたのは、その気になれば聖書の内容を知ることの出来る環境を整えるためだ  
ったのです。キリスト教徒であるという理由だけで処刑される北朝鮮でさえ、隠れキリシタンが  
40万人いると推測されています。8歳以上の年齢で、まともな思考能力を持った人が神に対し  
て求めたならば、いつの日にか聖書の内容を知ることの出来る環境に現在あるのです。少なく  
ても私はそう信じます。

ではどのようにすれば、その新しい契約を結ぶことが出来るのでしょうか。

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あ  
なたがたを立てた。」（ヨハネ15：16）

私はクリスチャンに限らず、仏教徒でも、たとえ共産主義者であっても、イエスからの一方的  
な選びによって新しい契約を結ばれる可能性を現した聖句だと思います。なぜなら、「わたしに  
はまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わた  
しの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ、ひとりの羊飼いとなるであろう。」  
（ヨハネ10：16）とイエスが預言しているからです。上記の聖句に個人を当てはめたならば、宗  
教や思想の囲いを外れるのです。それに友人と宗教や思想の違いがある方が会話がはずみ、楽  
しいですし。

通常「この囲いにいない他の羊」とは、イスラエル以外の国々を指すとされていますが、イエ  
スは「わたしは、イスラエルの家の失われた羊以外の者には、つかわされていない」。（マタイ  
15：24）と語っています。つまりイスラエルの失われた国だけに遣わされているということ  
です。イスラエルの失われた国とは、モーセ直属の国であり、それはユダヤ族とベニヤミン族が  
建国したイスラエルと、マナセ族（神武天皇）が建国した日本が該当します。けれどイスラエル  
は70×7年の許しの期間が過ぎたのですから、今後イエスが遣わされるのは世界の中で日本ただ

一国となります。そもそもイエスがバプテスマのヨハネから洗礼を受け、キリスト（救世主）として歩み始めた目的はマラキ書最後の預言である、「これはわたしが来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである。」によります。その神の呪いは十戒から来ていますから、モーセ直属の国以外は該当しません。つまりキリストは十戒影響下にある日本が、神からの呪いを受けないようにするため、遣わされるのだと言い換えることが可能です。

とても重要な事なので繰り返しますが、日本国が失われたイスラエルの支族によって建国されたということは、十戒の影響下にあるということなのです。あなたが「そんなこと知らないよ」と、思ったのであれば、そう思うであろうことも聖書に書かれています。それはマナセ族のマナセという言葉の意味についてです。

ヨセフは長子の名をマナセと名づけて言った、「神がわたしにすべての苦難と父の家のすべての事を忘れさせた」。（創世記4 1：5 1）

マナセとは「忘れさせる」という意味で、日本人は日本国のルーツであるアブラハムからマナセ族に至る歴史が書かれた旧約聖書を忘れてしています。もっと具体的に言うと、なぜ大晦日に大掃除をして夜更かしをするのか、なぜ正月の七日間お餅を食べるのか、なぜボーナス（餅代）が出るのか、なぜ葬式の帰りに塩で身体を清めるのか、日本人は理由が解らずに行っています。その理由はすべて旧約聖書に書かれています。私たちは旧約聖書に書かれているその理由を先祖代々忘れていただけなのです。興味のある方は色々検索してみてください。その他ぞろぞろと出てきますよ、私たち日本人が理由もわからず行っている風俗習慣の多くが旧約聖書由来であることが。

極めつけが「おみこし」でしょう。祭りの閉めに行われる神輿が聖櫃（アーク）のレプリカであることは何度もテレビ等で紹介されているので、ご覧になった方も多いかと思います。私たち日本人が祭りで練り歩く「おみこし」の本来の中身は、十戒が書かれた石板＝旧約の契約書です。つまり私たちが祭りで神輿を練り出すたびに、知らずのうちに十戒の民であることを宣言していることになっていたのです。もう一度旧約聖書最後の聖句を転記します。

「これはわたし（神）が来て、のろいをもってこの国（イスラエル&日本）を撃つことのないようにするためである。」

との聖句に対して、

「わたし（イエス）にはまた、この囲い（イスラエル）にいない他の羊（日本）がある。わたしは彼らをも導かねばならない。彼らも、わたしの声に聞き従うであろう。そして、ついに一つの群れ（イスラエル+日本）、ひとりの羊飼（イエス）となるであろう。」

とのイエスの預言があります。イスラエルは現時点でイエスを救世主キリストとは認めていませんが、かつてのイエスの導きにより、イエスに従う未来が来るでしょう。日本に対してはこれからイエスの導きがあり、同じように日本もイエスに聞き従う時がきてイスラエルと日本が一つの群れとなるとの預言なのです。

ただし、「私こそがイエスキリストだ」と言う者がいたとしたら、それは全員偽物です。聞き従ってはいけません。なぜなら新しい契約の印が、「真理の御霊（みたま）」だからです。

以下、ヨハネ14：15～17

もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしの戒めを守るべきである。わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。

それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

イエスとの「新しい契約」の印とは、真理が何かを見分ける力が神から送られてくるということです。別にイエスと顔を突き合わせて契約書に判を押すわけではありません。

次章で末日が何年何月何日なのかを明らかにする前に、もう一つだけ説明したいことがあります。それは、荒らす憎むべき者が立つのは、「神殿」ではなく、「神殿のようなもの」に立つという事です。

「また荒らす憎むべき者の翼に乗って来るでしょう。こうしてついにその定まった終わりが、その荒らす者の上に注がれるのです。」（ダニエル9：27）

上記の聖句に神殿という言葉はありません。で、私が「神殿」ではなく「神殿のようなもの」と言っている理由は以下の聖句からきています。

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）」（マタイ24：15）

「荒らす憎むべき者が、立ってはならぬ所に立つのを見たならば（読者よ悟れ）」（マルコ12：14）

「エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が近づいたとさとりなさい。」（ルカ21：20）

以上三つの聖句は神殿が破壊されるとのイエスの預言に対し、「いつ、そんなことが起きるのでしょうか、あなたがおいでになる時や、世の終わりには、どんな前兆がありますか」との弟子からの質問の答えを、マタイ、マルコ、ルカが三つの視点から記述したものです。（読者よ悟れ）の記述が無いので、ルカの視点からは西暦70年の神殿破壊のことが語られていることが解ります。けれどマタイとマルコはダニエル書に描かれた遠い未来の預言を示しています。そこには神殿との直接的な関連はありませんが、ルカの視点からの関連において、「聖なる場所」および「立ってはならぬ所」が「神殿のようなもの」だと解ります。



## 荒らす憎むべき者

---

これが「荒らす憎むべき者」の正体です。「荒らす憎むべき者が、立ってはならぬ所」に立ってしまったのです。



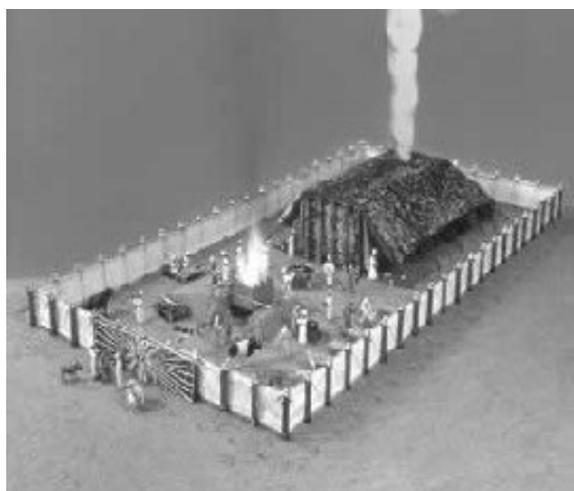
「神殿のようなもの」とは、「福島第一原発3号機プルサーマル」の事です。以下、神殿との類似点を列挙します。

まず大きさですが、ソロモン神殿の境内は南北450×東西300mだったと伝えられています。3号機は1号機～4号機で1グループとなっておりますから、爆発以前の航空写真に南北450×東西300mの枠を描き込んでみると、海水の注入口を含めた諸設備がちょうど枠内に収まります。おまけに建てられた方角まで一致していることが解ります。

また、Google地図で、「福島第一原子力発電所」と検索を掛けると下の画像のように赤いテロップAで3号機を指し示します。「福島第一原子力発電所」の中心である「福島県双葉郡大熊町夫沢北原22」が、3号機だからです。



次に外部構造ですが、福島第一とソロモン神殿。上下見比べてみると位置関係が似ていますよね。「神殿」に該当するのが3号機です。



左の画像は神殿の原型である「幕屋」です。日本の神社と基本構造が同じで上の画像の中心、「神殿と至聖所」に該当します。何か燃やしていますね。祭壇でいけにえの動物が焼かれていたのです。それは灰になるまで徹底的に焼き尽くす「常供の燔祭」と呼ばれる儀式でした。焼かれる動物はMOX燃料に該当します。一度燃やした核燃料をさらに徹底的に燃やすMOX燃料は3号炉だけに用いられていました。

小屋からの煙は至聖所の中にある聖櫃から立ち上る正体不明の雲です。中に入れるのは大祭司であり、水で手足を清めなければ死にます。原子炉建屋に入った作業員も同様に、放射能を洗い流すために水で身体を清めます。

次に神殿＝3号炉の内部構造ですが、ソロモン神殿や幕屋の中心にあったのは聖櫃（アーク）であり、聖櫃には「マナの壺」と「アロンの杖」、そして「十戒石」の三種の神器が収納されています。

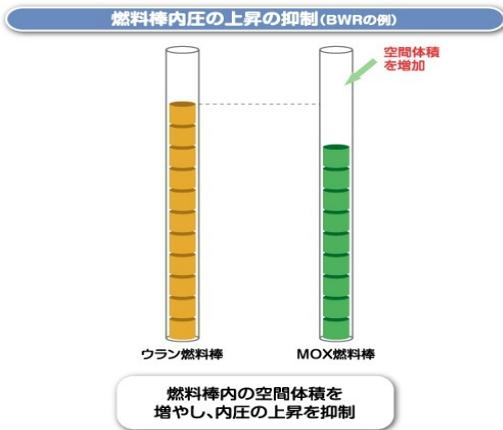
マナの壺とは、出エジプト後のモーセ一行の飢餓を救った食べ物を入れた壺のことです。マナの壺からは餅の原料となる「マナ」が打ち出の小づちのように無尽蔵に出てきたと聖書に記述されています。それを仲間に切り分けるために使った板の事を「まな板」と言うそうです。前方後円墳はマナの壺の形をなぞったもので、本物のマナの壺がどこかの古墳の中に秘められているのではないかと噂されています。

まな板はともかく、マナが無尽蔵に出てくるところは、核燃料から無尽蔵にエネルギーを取り出そうとするプルサーマル計画と通じるところがありますよね。プルサーマル炉は3号機だけです。形も似ているので、原子炉格納容器＝マナの壺と考えていいでしょう。



の語幹、糞（クソ）と同根です。猛烈で手のつけられない性質だそうです。私は「アロンの杖」と「草なぎの剣」は同じ物だと思っています。

燃料棒と形も似ていることですし、燃料棒＝アロンの杖ということでもいいでしょう。



ア  
ロ  
ン  
の  
杖  
→



最後に「十戒石」がありますが、十戒石とは契約書なので、外観よりもその内容が重要です。四番目の戒めである安息日の律法を守らなければ死に値する罰が下されます。三号機の事故は電源喪失による核燃料の暴走が原因でした。核燃料を休ませることができずに暴走させたので、死に値する事故が発生したとも言えるでしょう。

「神殿のようなもの」とは、「福島第一原発3号機プルサーマル」だったのです。

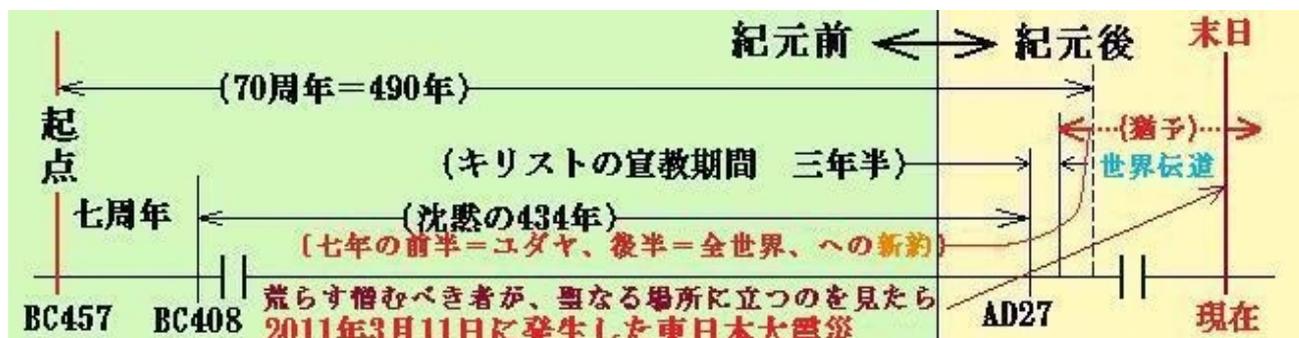
ダニエルは原子力発電所などという言葉は知らないし、爆発によるキノコ雲も見たことはなかったでしょう。そんなダニエルが遠い未来に起こる「福島第一原発3号機プルサーマル」の事故を透視したならば、「神殿に禍々しいものが立った」とイメージするはずですが、けれど神殿ではなく「神殿のようなもの」なので、預言に「神殿」と記述することはできなかったのです。

イエスのダニエル書に関する預言に戻ります。

「預言者ダニエルによって言われた荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つのを見たならば（読者よ、悟れ）、そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。屋上に居る者は、家からものを取り出そうとして下におりな。畑にいる者は、上着を取りにあとへもどるな。その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。」（マタイ24：15～19）

思い出して頂きたいのですが、原語をたどると「荒らす憎むべき者が、聖なる場所に立つ」という事件と、「高い所に急いで逃げなさい」という事件とは同じ「その時」の中で発生していましたね。時系列的には二つの事件を起こす引き金となる異変が、二つの事件の前に起こっていたのです。

それは2011年（平成23年）3月11日（金）に発生した、東日本大震災です。原発事故は地震による鉄塔の倒壊により電源を失ったのが原因ですし、「高い所に急いで逃げなさい」という事件は津波のことです。



ここに至ってようやく上図の「70週の預言」に末日の具体的な年月日を記入することができました。末日は2011年3月11日に、すでに始まっていたのです。けれど「70週の預言」はこれで終わったわけではありません。さらに預言は続きます。そしてなにより「末日」はヨハネの黙示録に描かれた世紀末へとつながっているのです。黙示録の冒頭を記述します。

イエス・キリストの黙示。この黙示は、神が、すぐにも起こるべきことをその僕たちに示すためキリストに与え、そして、キリストが、御使いをつかわして、僕ヨハネに伝えられたものである。（ヨハネの黙示録1：1）

黙示録には人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったような大地震をはじめとする天変地異が、これでもか、これでもかとばかりに波状攻撃で襲いかかってくるのが預言されています。注目すべきはそんな大災害が「すぐにでも起こる」と記述されていることです。けれど黙示録が書かれてから約2000年経ちましたが、そんな大災害は起こってません。預言は外れたのでしょうか。

いいえ、「70週の預言」からすると、黙示録の時代に入ったのは末日である2011年3月11日なのです。イエスの言葉を思い出してください。福音が世界の隅々まで伝道された後に大艱難がやって来ると預言していました。つまり、もうすぐ起こるのです。今は嵐の前の静けさではありません。では、嵐の前の静けさはいつまで続くのでしょうか。

三年半です。

なぜなら黙示録に「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない」（ヨハネの黙示録7：3）と記述されているからです。印を押すとは新しい契約のことで、上図の（七年の前半=ユダヤ、後半=全世界、への新約）のうち、後半の三年半が該当するからです。つまり2011年3月11日の三年半後である、2014年9月8日までは「地と海と木」が損なわれることはないのです。たとえ放射能で汚染されることはあっても。

すみません。ここで力つきました。

黙示録が不確定要素となり、2014年9月8日以降のダニエル書を読み解くのが困難になったから

です。なにしろ黙示録を読み解くためには黙示録の預言を時系列に並べ直し、第四エズラ書を含むダニエル書以外の預言書とも整合性を取らなくてはならないという、気の遠くなるような作業が不可欠だからです。

ただし断片的ではありますが、「三号機の爆発」を起点として今後のターニングポイントとなる日を二つ特定することができます。

「常供の燔祭が取り除かれ、荒らす憎むべき者が立てられる時から、千二百九十日が定められている。待っていて千三百三十五日に至る者はさいわいです。」（ダニエル12：11、12）

三号機が爆発したのが2011年3月14日（月）ですから、その1290日後は2014年9月24日（水）です。そして爆発から1335日後は2014年11月8日（土）となります。つまりその間、45日を耐え忍ぶことができたならば、希望の光が見えてくるということです。

とても根本的な疑問ですが、なぜ黙示録に描かれた大艱難（大災害）が起こる必要があるのでしょうか。

三つの理由があります。

一つ目は、大艱難が儀式だということです。それがどういう意味なのかはパブー上に無料公開した「天井裏のイエスキリスト」を読めば解ります。その際、最後のページの左下に記録されている「最終更新日」を確認してみてください。「2011-03-11 11:39:03」となっています。「天井裏のイエスキリスト」は東日本大震災発生約3時間前に公開したのです。そこに大きな意味があることも「天井裏のイエスキリスト」を読まれたならば解ります。

二つ目は、大艱難とは欧米文化のアポトーシス（細胞の自殺）だということです。

アポトーシスを説明する前に、ガイア理論を説明させてください。

ガイア理論とは地球を一つの生命体としてとらえる考え方です。ガイア理論は地球を球の形をした木になぞらえます。地球の大気は樹皮であり、地球表面の植生は生きた細胞である形成層と、木質部に対応します。岩石は芯材です。木の97パーセントは死んでいます。堅い芯材や木質は死んでいるし、厚い樹皮も死んでいます。生きているのは樹皮の下にあって木質の周囲を囲んでいる細胞の薄い膜である形成層です。その生きた形成層を死んだ樹皮と木質部、芯材が守っています。同様に大気と岩石が地球の植生を守っているのです。人間の身体から生じた爪や毛も死んでますよね。その死んだ爪や毛が身体を守っているように、地球の生命から生じた大気は地球の生命を紫外線や放射能から守っています。

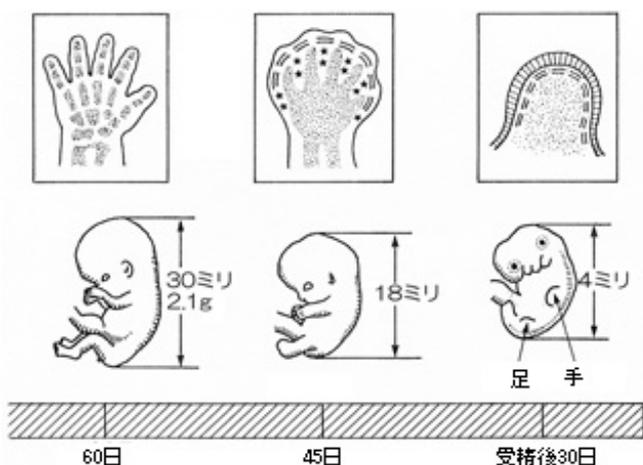
木の97パーセントは死んでいますが、私たちは死んだ樹皮や木質、芯材を含めた根や葉や形成層が生きた一本の木であるとみなします。同様に死んでいる大気や岩石、マントルも含めて、生きている生命を守り育む地球を一つの生命体として見なすべきだというのがガイア理論です。つまり地球は生きているのです。

ガイア理論で地球を哺乳動物と比較した場合、代謝・進化・恒温性・科学的安定性・自然治癒の項目で、地球と哺乳動物とは同じ能力をもっています。ただし地球には生殖能力は無いとされています。

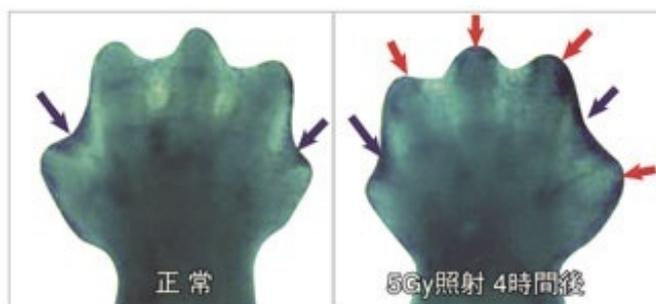
はたしてそうでしょうか。人類が他の惑星に移住出来たとしたら、それは地球が他の惑星に生殖したことになるのではないのでしょうか。私は地球の生殖能力を担っているのが人類だと思っています。

新石器文化の鉛直線上にある欧米文化は月に到達することができました。けれど同時に人類を何度でも滅亡させることのできる核兵器も生み出しました。今までは人類を宇宙に解き放つために欧米文化が発展させてきた科学力が必要でした。けれどこれ以上の破壊兵器は必要ありません。もう欧米文化の役割は終わったのです。その根拠は「本編」に記述してあります。

ガイア（地球）の自然治癒能力により、自然を喰い荒らす欧米文化が大艱難に遭うという見方もできますが、私は欧米文化のアポトーシスが艱難だと思います。下図がアポトーシスの説明です。



受精後30日頃、手や足先にはまだ指らしきものは見えません。およそ45日目、その中にやがて骨となる指の軟骨が現われて、ぐんぐん伸びていきます。このときの軟骨の間にある細胞は、はじめは軟骨の成長を手助けしているのですが、やがていつまでも自分が残っていては邪魔になると気付くのです。そして60日頃、軟骨がある長さになると、間にある細胞は自ら死を選んで消えてしまいます。(アポトーシス)。



左側の画像は正常にアポトーシスが進んでいます。指の間の不要になった細胞（紫色の部分）だけが死につつあるからです。一方右側の画像は指の細胞まで紫色になっています。このままでは指が無くなって奇形となってしまいます。

結論を言うと、母体であるガイアから人類が生まれ出る（惑星移住）前に消え去るのが、指の間の細胞に例えることのできる欧米文化です。欧米文化とは、新石器文化の鉛直線上に君臨する自殺する細胞なのです。そして母体から生まれようとしている指の細胞が縄文文化なのです。

私たちの心の奥底に眠っている縄文文化が、右の写真のように欧米文化の自殺に巻き込まれて、共に死なずに済むにはどうすればよいのでしょうか。それはイエスの新しい契約を信ずること

だと思えます。イエスは新しい契約によって、縄文文化が右の画像の赤い矢印の先のように死なないう、日本のバックに付いて友人として応援すると言っているのですから。

ただし、欧米人の犠牲の上に日本人が生き残るということではありません。欧米人だという理由でアポトーシスされるわけではないからです。生き残り、日本と手を取り合って新しい文明を築く欧米人はたくさんいることでしょう。惑星間移住には彼らの力が必要不可欠なのです。日本人は先頭に立つことは苦手ですから、例えばアメリカ人をバックアップする役目がお似合いです。先頭に立つヒーローはハリウッド映画のようにアメリカ人が担うべきです。アポトーシスするのは欧米人ではなく、あくまでも覇権主義の欧米文化なのです。

同様に日本人だからといって、生き残れるわけではありません。あくまでも縄文文化に目覚めた者だけがガイアの生殖能力を担い、新しい時代に生まれ出ることができるのです。

大艱難が起こらなければならない三つ目の理由は、日本人が縄文文化に覚醒する引き金として大艱難が必要だからです。

日本人とユダヤ人は自分の不幸を笑うことができると言われています。ユダヤ人は何千年にも渡る迫害の歴史を生き抜いてきました。日本人は縄文の時代から活断層の巣、つまりは火山に囲まれた台風の通り道である土地で、最終氷期の氷床・氷河が最大だった時代から、地震・噴火・津波・台風（？、いつの時代から台風の通り道となったかは定かではありませんが）等の災害を生き抜いてきました。両者共、「自分の不幸を笑える」バイタリティーがなければ子孫を繋げ続けることは出来なかったのです。

実際、東関東大震災の津波ですべてを失ったおばあちゃんが、明るく楽しそうに現状を語る映像や、お年寄りには何の希望も見出せないであろう悲惨な状況を慰め、同情しようとするアナウンサーに、元気いっぱいルンルン気分で応答しているおじいちゃん。津波で家族や友達を失っても、冷静に自分を見つめる前向きな若者の姿。私はそんな福島の人々の姿に、冒険家上村直樹の言葉が重なりました。彼は「絶対絶命のピンチに陥ると、思わず笑みがこぼれる」と語っていたのです。

もしかしたら、ユダヤ人と日本人の共通するご先祖様であるヤコブの性格がそうさせるのかも知れません。相撲の原型となったと言われるエピソードが聖書に記述されています。

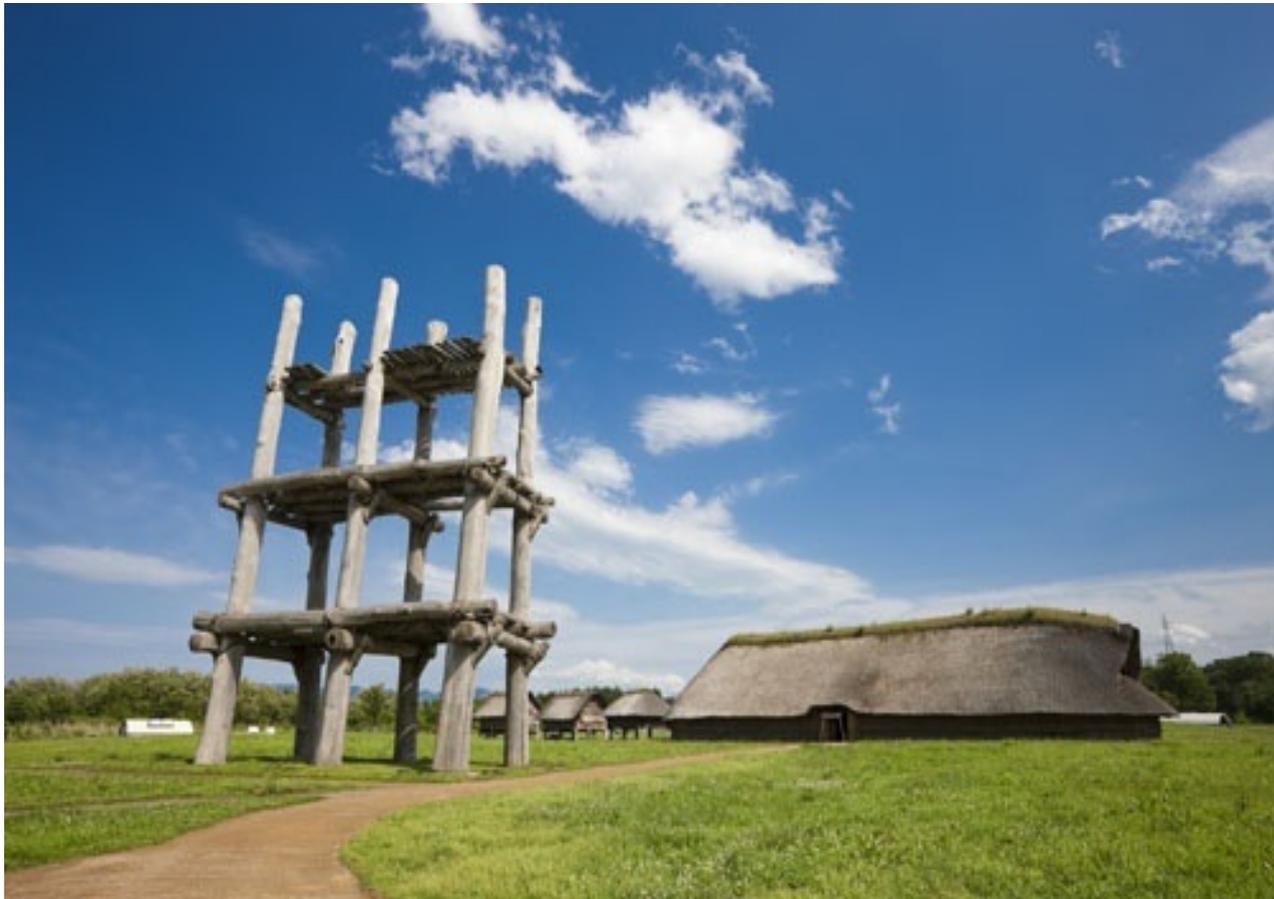
夜、ヤコブが一人でいると、どこからともなく見知らぬ男がやってきて、突然ヤコブに組みかかってきました。格闘は夜通し行われました。体力の限界を超え、腿のつがいが外れてフラフラ、ヨタヨタになってもなお向かってくるヤコブに相手は、「もうよい。夜が明けるので帰る。お前はこれからはヤコブと言わず、イスラエルと名乗りなさい。お前は神と戦って勝ったのだから」と告げ、ヤコブに祝福を与えて帰って行きました。ヤコブは天使と戦っていたのです。（創世記32：24～30）

ここに至るまでのヤコブの人生は悲惨なものでした。けれど彼はどんな逆境にもめげず、ネバーギブアップの精神で生き抜いてきたのです。それゆえ天使はヤコブに祝福を与えたのでした。そしてヤコブは名実ともに十二支族であるユダヤ人や日本人、そしてなにより一番大きな祝福を受け、世界中の国々に散らばったエフライム族の祖となったのです。

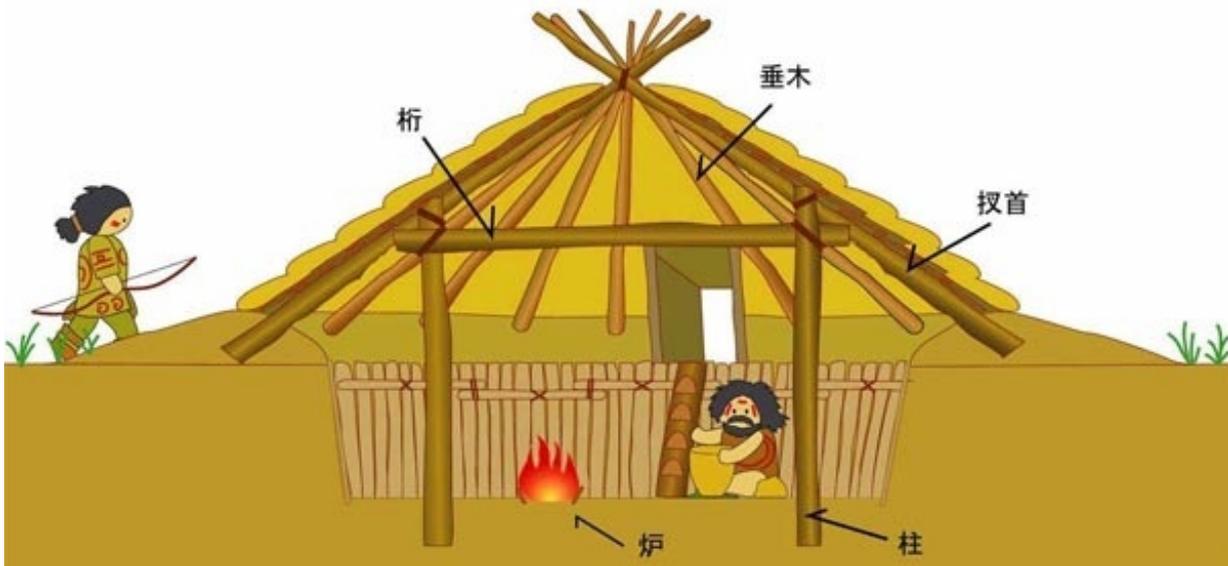
たとえどんな大艱難が待ち受けていようとも、「自分の不幸を笑えるバイタリティー」と、「ヤコブのネバーギブアップ精神」、そして縄文魂、なによりイエスの友情があれば無敵状態のスーパーマリオとなることが出来ます。

縄文魂について説明します。

4500年前、縄文時代の三内丸山遺跡です。六本柱の奥には当時の公民館が建っています。巨大です。



## 竪穴住居の構造



に比べたならば、住居は質素なものでした。大きな家を建てる技術があっても、一万年以上ずーっとみんな同じ広さの竪穴住居に住んでいたのが縄文時代です。これが新石器文化ならばどうなるでしょう。新石器文化に三内丸山遺跡の公民館を建てることのできる技術があれば、当然権力者が広い敷地を占有し、負け組を奴隷として少しでも広くて部屋数のある住居を建てさせ、そこを自分の住居としたことでしょう。新石器時代以降の住居が如実にそれを証明しています。現代日本の家も新石器文化の進化形である欧米文化と変わりませんね。囲炉裏を中心に置いた古い家に縄文住居の片鱗が残されているだけです。

住居は質素ですが、そこには豊かな家族の「だんらん」があったと言われていています。夜、見渡す範囲に家族がいて、炉の明かりを囲んで家族みんながそれぞれ語り部となっていたことでしょう。

縄文文化と新石器文化の方向性の違いを端的に言い表すならば、百姓化と分業化の違いです。

縄文文化は百姓化しています。ここで言う百姓とは農業従事者という意味ではありません。縄文時代にも栗の木や一年草の栽培が行われていたようですが、そうではなく「百姓」＝「百のかね」＝「百の職業」という意味です。家族単位で百の職業をこなしていたのです。したがって平等です。だれに媚びることなく、各自が生活を自立させてたのですから。各家庭の生活基盤が自立しているので、貨幣制度はありません。必要ないのです。したがって金持ちも貧乏人もいません。貧富の差がないので争いも起きません。また自立できない障害を長年持っていたことが解る人骨が出土されていることから、縄文文化は福祉制度も充実していたのではないかと推測されています。

各家族が平等であるという事は、誰もが互いに友情関係を結ぶことができた世界ということです。けれど奴隷と主人の間に友情はあり得ません。奴隷のために命を捨てる主人はいませんし、主人のために自ら命を捨てる奴隷もいないのです。いたとしたら、それは奴隷と主人の関係ではなかったということです。なぜなら上下関係があると友情は生じないのですから。昔から言いますよね、友達からの借金は友情を壊していくと。

「わたしのいましめは、これである。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互い

に愛し合いなさい。人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛は無い。」

(ヨハネ15：12、13)

上記のイエスの言葉がすべてを物語っています。イエスの言う天国とは上下関係の無い世界です。つまり新石器文化ではなく、縄文文化が天国にとっても近いのです。

東関東大震災では略奪が起こるところか、互いに食料を分け合い助け合い、食料品店で価格を下げた所も少なくありません。欧米文化の到達点である資本主義社会の常識ではあり得ないことが生じたのです。資本主義の根本原理である需要と供給の関係から、価格を数十倍に上げてウハウハ儲けるべき時のはずなのに、価格を下げたのです。

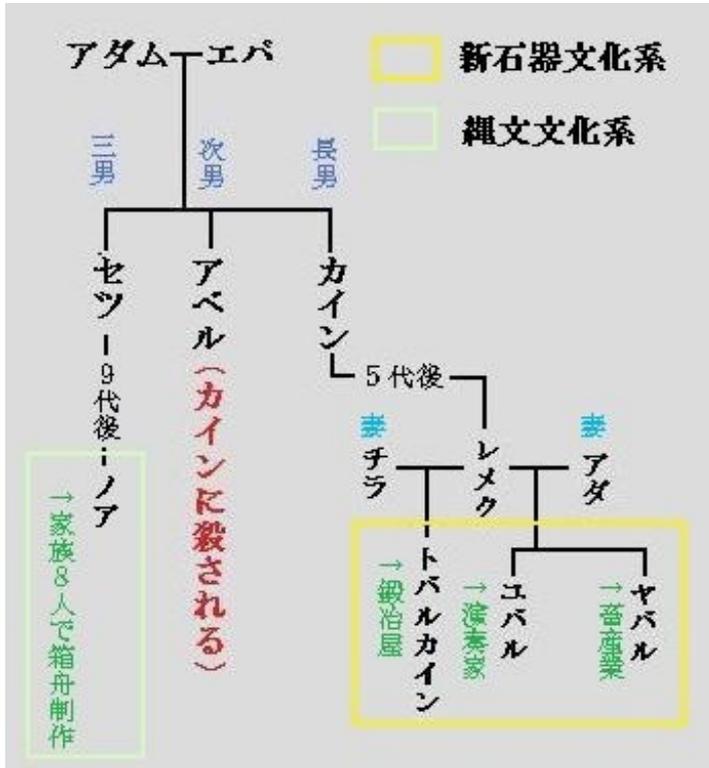
世界中が驚嘆しました。日本人の民度の高さに。福島県人の民度の高さに。

それは日本人が旧約聖書に記されたアブラハムの子孫である「選民」だから取れた行動ではありません。どう、ひいき目に見ても、モーセが引き連れていた十二支族の民度は低いものでした。福島県人の行動は縄文魂から来ていたのです。

対する新石器文化＝分業化を説明します。

分業化については創世記に記述されています。ノアの洪水以前の時代の話です。

「アダはヤバルを産んだ。彼は天幕に住んで、家畜を飼う者の先祖となった。その弟の名はユバルといった。彼は琴や笛を執るすべての者の先祖となった。チラもまたトバルカインを産んだ。彼は青銅や鉄のすべての刃物を鍛える者となった。」 (創世記4：20～22)



ユバルは演奏家ですから、演奏の対価として金銭か、食物等を得ていました。演奏だけではお腹は膨れませんか。したがって分業化は貨幣制度を発達させます。当然貧富の差が生じ、貧富の差を利用した戦争も生じます。

トバルカインは新石器文明の鉛直線上にある青銅器、鉄器文明にあるので、欧米文化のはしりともいえます。なので彼は武器商人の先祖であり、新石器文化系に属します。

アダ（名前の意味は光）とチラ（名前の意味は闇）はレメクの二人の妻であり、レメクは弟を殺したカインの末裔です。レメクは二人の妻に、「自分が受けた傷の七十七倍の傷を相手に与えて復讐する。自分を傷付ける者はぶち

殺す」と宣言しています。(創世記4：23、24)

彼のような人間が集まった社会は、母数が十人だろうと十億人だろうと、最後の一人になるまで殺し合いを続けることでしょう。欧米文化の行き着く先を示しています。

一方ノアはカインとは別系統であるアダムの三男セツの子孫です。彼は家族8人の力を合わせ

、縄文人が大きな公民館を共同制作したように巨大な箱舟を建造しました。これがレメクならば金で職人に頼むか、奴隷を脅して箱舟を建造したことでしょう。ノアは縄文文化系に属します。

ノアの大洪水では新石器文化系が一掃され、縄文文化系であるノアの一族が生き残りました。末日にも同様のことが起こるのです。

創世記は、ノアの洪水の原因がレメクのような人間が引き起こした暴虐にあったとしています。

主は人の悪が地にはびこり、すべてその心に思いはかることが、いつも悪いことばかりであるのを見られた。主は地の上に人を造ったのを悔いて、心を痛め、「わたしが創造した人を地のおもてからぬぐい去ろう。人も獣も、這うものも、空の鳥までも。わたしは、これらを造ったことを悔いる」と言われた。しかし、ノアは主の前に恵みを得た（創世記6：5～8）

ここで一つの疑問が浮かびます。人類が悪いのなら、人類だけを滅ぼせばよいのに、獣も、這うもの（蛇や昆虫）も、空の鳥までも、人類の巻き添えをくらうのはなぜなのでしょう。

その答えは、地球上に居る生命は皆一つの生命体、ガイアだから、一部の動物を除き一蓮托生で淘汰されたのです。

欧米文化のはしりであるカインの末裔は、自然（ガイア）から、自分に都合のいいものだけを奪い続けようとする文化でした。つまりガイアに生じた癌細胞なのでノアの洪水で除去されたのです。

その癌細胞が発現する要因の一つが職業の分化です。



職業が悪魔の正体であるとした民族がいます。神話を今に生きる人々、マリ共和国のニジェール川流域に面したバンディアガラ断崖に居住する民族、ドゴン族です。

20年ほど前だったかと思います。待合室に置いていた雑誌をふと手にすると、グラビア写真にドゴン族の祭りの様子が載っていました。説明によると、平和に暮らす村人たちの元へ突然悪魔達が乱入してきます。その悪魔達の仮面は様々な職業を現すとされていました。つまり職業により、平和が掻き乱されたという神話を祭りで再現していたのです。

私には、平和に暮らす村人達が縄文人で、そこに稲作の技術集団である弥生人が乱入したことにより、戦争が広がったことと同じに思えます。縄文時代には無かった戦争の傷跡をもった人骨が、弥生時代以降急増しているからです。

縄文時代には貨幣制度も職業もありませんでした。村人の共同作業時に、仕事の分化はあった

でしょうが職業なんて無かったのです。

欧米文化に毒されている私たちにとって、男が無職であることは恥ずかしいこととされています。働いて金を稼ぐことが社会人として当然であり、高給を得て権力を握るということが、社会人としての価値を高めるとされています。

そんな価値観の暗部を、原発事故は見事にえぐり出し、白日の元にさらけ出しました。

以下、2チャンネルの書き込みから引用させていただきます。

高給を得て権力を握るということは、当然に責任も負うということなのだが、日本の統治機構にはそれはない。そして何時の間に責任は国民の連帯責任になっていたw理由は国民は原発の電気を使っていたわけだからというらしい。その理屈が通るほど日本人はお人よしではないがな。まず原発村の利権者は凄まじい利益と権限を独占的に支配していた。それに対して反論する事も逆らう事も許されない状況で責任は国民連帯責任という論理は余りにも都合が良すぎる。まずは責任を明確にし、誰が莫大な富を得て、誰が権限を持っていたのかを国民に晒すところから始めないと福一問題は絶対に収束しない。

「絶対的権力は、絶対的に腐敗する」とはよく言ったものです。

利潤を追求する資本主義が間違っているということは、とても単純な話なのです。日本昔話の「こぶとり爺さん」、「花さかじじい」、「すずめのお宿」等で繰り返し戒められてきたのは、「分かち合いなさい、欲深さは必ず報いを受けるのだから」というあたりまえのことです。

大艱難を生き延びた人々が造りだす文化には職業がありません。したがって利潤を追求する会社組織なるものはすべて壊滅、解体し、学校や研究所、村や町の公民館が企業の代わりに機能します。そう預言されているのです。

彼らは家を建てて、それに住み、  
ぶどう畑を作って、その実を食べる。  
彼らが建てる所に、ほかの人は住まず、  
彼らが植えるものは、ほかの人が食べない。  
わが民の命は、木の命のようになり、  
わが選んだ者は、  
その手のわざをながく楽しむからである。  
彼らの勤労はむだでなく、  
その生むところの子らは災いにかからない。  
彼らは主に祝福された者のすえであって、  
その子らも彼らと共にいるからである。

(イザヤ65：21～23)

つまり縄文時代と同じく商行為が行われていないのです。

ただし、縄文時代と大きく異なる点があります。高度な技術革新が行われます。各家庭に3Dプリンター、3Dスキャン、インターネットくらいは常備されることでしょう。なにしろ宇宙開発が使命となっているのですから。

そんな新しい時代を呼び込むために大艱難があるのです。

欧米文化が到達した資本主義社会が崩壊し、各自が被っていた職業という仮面が外れた時、多くの日本人は縄文魂に覚醒するのです。

最後に、イエスの「山上の垂訓」を記述してページを閉じさせていただきます。

「こころの貧しい人たちは、さいわいである、

天国は彼らのものである。

悲しんでいる人たちは、さいわいである、

彼らは慰められるであろう。

柔和な人たちは、さいわいである、

彼らは地を受けつぐであろう。

儀に飢えかわいている人たちは、さいわいである、

彼らは飽き足りるようになるであろう。

あわれみ深い人たちは、さいわいである、

彼らはあわれみを受けるであろう。

心の清い人たちは、さいわいである、

彼らは神の子と呼ばれるであろう。

義のために迫害されてきた人たちは、

さいわいである、

天国は彼らのものである。」

(マタイ5：3～10)

では、聖霊の導きに感謝して、筆を置きます。

